VIEW21

2008 October 10月

高校版 Volume 4

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

「思いきりやりなさい」その言葉が教師としての生きざまを決めた
長崎県立五島高校校長◎田川祐治

4 特集

つなぐ
教師の教科指導力 前編

座談会＆インタビュー［私が考える教科指導］

6 英語 「What my students want」を常に考えることが指導力を高める
◎長崎県立北松西高校　尾崎健次、長崎県立西陵高校　狩野博臣、島﨑史子

10 数学 いま持つ「知識」を使い、発想し展開する「考える力」を育てる◎徳島市立高校　湊 雅邦

13 国語 「言語運用能力」を伸ばす指導が、いま求められている◎愛知県立一宮高校　栗木晴久

16 公民 多面的な見方を提示し、考えさせる授業で「社会への目」を育てる◎東京都立国立高校　小原孝久

18 理科 考え方のストーリーを重視し、物理現象の本質を見極める力を培う◎栃木県・私立文星芸術大附属高校　増田信夫

20 データで見る中学校

将来の進路や職業などをテーマにした総合学習が増加
Benesse教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より

21 指導変革の軌跡

22 沖縄県立那覇国際高校
進路検討会の導入と改善◎進路検討会が進路部と学年団の密な連携を生み出し、生徒の躍進を支える

26 茨城県立古河第三高校
進学校への再起◎危機感を背景に学年団で統一した指導が生徒の意識を変えた

30 三重県立朝明高校
接続を重視したキャリア教育◎入学時と就職内定後の指導を徹底し、退学・早期離職を着実に減らす

34 10代のための「学び」考

松尾浩也 東京大名誉教授、日本学士院会員
新たな理論の創造に大切なのはじっくり研究対象に取り組むこと

36 未来をつくる大学の研究室

演劇学 早稲田大大学院 文学研究科 演劇映像学コース・日本語日本文学コース

40 VIEW'S REPORT

学びの意欲の本質に迫る体験型学習を目指して
ベネッセコーポレーション「キャリア・エデュケーション・プログラム（CEP）」の取り組み［前編］

45 教える現場、育てる言葉

自ら思考し行動することがプロ意識を養う
東京ウォッチテクニカム

48 地方公立高校の挑戦

新潟県立阿賀黎明中学校・高校／広島県立油木高校

54 生きたデータの見せ方・つくり方

1年生2学期の成績層別面談指導

60 VIEW'S SQUARE

本誌記載の記事、写真の無断複写、複製および転載を禁じます。

本文中、敬称略。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

「思いきりやりなさい」その言葉が教師としての生きざまを決めた

長崎県立五島高校校長 田川祐治 TAGAWA YUJI

生徒を育て、伸ばしたい。その思いは、すべての教師に共通する。しかし、いかに伸ばし、育てるか、その方法論はまさに多様である。20代の終わりに、自らの指導の在り方と教師観を決定づける出会いを得た長崎県立五島高校校長・田川祐治先生に、生徒を育て、そして同時に教師をも育てた先輩教師との2年間を振り返っていただいた。

初めて教壇に立ったのは1978年、五島列島にある高校でした。生徒数は約230人。生徒との距離が近い環境で、私は、教師は自らの熱意で生徒の可能性を広げることができる仕事だと学びました。5年間の島での勤務を経て、28歳で県内有数の進学校である長崎南高校に異動になったのですが、進学校で自分の授業が通用するのか、不安でいっぱいでした。また、教師が連携し、集団の力を生かして生徒を育てるという、大規模校ならではの指導にすぐに馴染めるのかも心配でした。

そんな私に、長崎南高校の先生たちはさまざまな仕事を任せてくれました。管理職やベテランが背負い込むのではなく、若い教師にも責任を持たせ、育てる文化がありました。そして、数学科の先輩から言われたのは「多くの入試問題を解きなさい」ということでした。今までと異なる環境は新鮮で、毎日が勉強でした。

赴任2年目、1年生の担任となった年、長崎南高校から教育委員会に籍を移していた平田徳男先生が、教頭として再び長崎南高校に戻ってこられました。平田先生は就任早々、私に言いました。「遠慮してはだめだ。やりたいようにやりなさい。やりすぎたときは、私が注意するから」。とても嬉しかったです。自分の後ろで見守ってくれる人がいる……と。平田先生は進学校としての長崎南高校躍進の基礎づくりに関わった二人でしたから、心強く感じました。

長崎南高校に慣れつつあった若い私は、ここの生徒はもっと伸びるはずだと信じ、とにかく問題を解かせました。休み時間中に教室に入り、机を回って授業開始前から宿題をチェックしました。宿題をしてこなかった生徒には理由をただし、厳しく叱責しました。その間、ほかの生徒は黙々と問題を解かなければなりません。緊張で静まり返った教室の様子を見たある先生に「まるで終戦直後の授業だ」と言われたこともあります。生徒の潜在能力を信じた指導ではありましたが、こんな指導で生

先輩教師の言葉

生徒と一緒に厳しさの中に幸せを探すのが教師です

諫早市立諫早図書館館長
HIRATA TOKUO 平田徳男

長崎南高校は、私にとっては教師としての母校です。前任校で私は、自分にもっと指導力があれば、生徒を十分に伸ばすことができたはず、という経験をしていました。自責の念を抱えた私を、長崎南高校の先輩たちは存分に鍛えてくれました。だから私は、若い先生を見守りながらも、自分がそうであったように、自由にのびのびやってもらいたかったのです。

生徒にとって、田川先生は怖い先生でしたが、同時に、教えてもらいたい先生でもありました。自分がどれくらい伸びるか、とことん鍛えてもらいたかったのです。私は、学校にはいろいろな個性の先生が必要だと考えます。多彩な先生が集まってこそ、多才な学校ができる。だからあのころ、私は田川先生に「思いきりやってください」とお話

撮影◎長崎県立長崎南高校にて

右 ひらた・とくお　長崎南高校、教育委員会勤務等を経て長崎南高校教頭、上五島高校、長崎東高校校長などを務め、2001年から現職。

左 たがわ・ゆうじ　奈留高校から長崎南高校へ。そのあと、県総務部を経て、佐世保南高校の教頭。2006年度より現職。

徒は付いてくるのだろうか……と迷いがあったのも事実です。

そんなとき、平田先生がある会議でこうおっしゃったのです。「生徒にはいろいろな仕掛けがあってよい。あの先生は怖いから勉強しよう、というのも一つの在り方だ」と。生徒にどこまで厳しくあり、どこまで求めるべきか、悩んでいた私には、まさに救いの言葉でした。「生徒の成長のため」という目的が同じなら、道はいろいろあってよいと教えていただいたのです。

対外テストの成績分析を県内高校で比較していたところ、「県内だけでなく九州全体、そして全国の学校に目を向けなさい」とつくり直しを命じられたことがあります。小さな島の高校から来た私にはそれだけで視野が広がる思いでした。しかし平田先生のねらいは別でした。

当初、学年団には他校の状況を見ても「うちにはうちの事情がある」という思いがありました。しかし、月日が経ち、全国の取り組みを参考にしたある教科の成績が全国比でぐんと伸びたことがわかる。すると、ほかの教科の先生は「うちにはうちの……」と言いわけできません。全国レベルで自校を見るうちに、学年全体が変わっていきました。「平田先生のねらいはこれだったんだ」とはっとしました。

私はたくさん叱られもしました。学習合宿の日程に自習時間を設けると、「教師が楽をするのか？　質問に答える時間をもっとつくりなさい」。学校指定の問題集を使おうとすると「自由に問題集を持ってこさせて質問に答えないとだめだ」。どんな問題を持ってくるのかわからないわけですから、こちらもたくさん問題を解いて力を付けるしかありません。厳しい指導で生徒を伸ばす半面、教師も厳しく鍛えられました。先生との2年間はきつくて、そして自分の成長が実感できる日々でした。九州大合格者数が初めて40人を突破するなど、学校としても成長期を迎えました。

平田先生は校長として他校に栄転されるとき、「私はあなたにとうとう一度も『やりすぎだ』と言わなかったね」とおっしゃいました。2年前の言葉の裏にあった平田先生の覚悟と器の大きさに改めて気づかされました。

平田先生には多くを教わりました。そして今日まで私は、「進む道を迷ったときは苦しい方を選ぶこと」を自分の生き方としています。ここで楽な道を選んだなら、きっと先生から叱られるな……と今でも思うのです。

ししたのです。

学年会の資料をつくり直してもらったこともよく覚えていますよ。当時の日記を読み返すと、こう書いてあります。「今、『上を向いて歩こう』をキャッチフレーズに、1年の田川先生をたき付けている」。若い田川先生が燃えれば、まわりの先生も大きな刺激を受けるはずだという思いもありました。校内会議で九州の先進校の事例が田川先生からだけでなく、多くの先生から頻繁に報告され、先生方が視察にも積極的に向かうようになったときは「これだ！」と思ったものです。

きついことは嫌だ、というのは生徒も教師も同じだと思うのです。ただ、きついのは嫌だという半面、鍛えられたいという欲求もある。だから私は「あのころは楽しかった」ではなく「あのころは厳しくて、きつかった。けれど、よかった」と振り返りたかったのです。

だれしも、楽な道を選びたくなることはあるでしょう。しかし、幸福は、楽しいことを選んだ先にあるのではなく、しなければならないことを楽しんでする中にあると思うのです。教師が、すべきことを思い通りに行う厳しさと幸せが、あのころ確かにありました。

※プロフィールは取材時（08年8月）のものです

SPECIAL ISSUE

特集

つなぐ 教師の教科指導力

前編

教科の指導力を高めていくことは、教師が抱える最大の課題の一つである。
多忙化など教師を取り巻く環境が厳しく、生徒の気質が変化しているといわれる中、
どうすれば指導力を高めていくことができるのか。
『VIEW21』では、「つなぐ」をキーワードとし、10月号、12月号連続で教科指導力を特集する。
前編の今号では、いま求められる教科指導力はどのようなものかを
7人の先生方にうかがった。

7人の先生方へのインタビューから教科指導力を考える

1 生徒に身に付けさせたい力

英語	母国語以外の言語による論理的思考力
数学	基本的概念を身に付け、それを基に論理的に考える力
国語	論理的に書かれた文章を的確に読む力・書く力（言語運用能力）
公民	社会問題を多面的・客観的に見、前向きに社会を批判できる力
理科（物理）	基礎・基本の概念を形成する過程で得られる論理的思考力、直観力、洞察力

2 教師に必要な教科指導力の要素

3年間を見通す力	ゴールを見据えた上で、年間計画を立て、教材を選び、配置する
生徒把握力	生徒の学力・関心等の実態を客観的に把握する
作問力・評価力	生徒の理解度に応じ、問いたい力を明確にした作問とその評価
情熱と根気	生徒と本気で向き合う姿勢を持ち、生徒との信頼関係をつくる
学びへの動機付け	自信を持たせる。教科と社会のつながりを意識させる。 生徒の心の琴線に触れる授業をする

3 指導力を高める方法

個人で高める

国の教育政策に関心を持つ
中央教育審議会の答申や学習指導要領を読み込むなどして、社会が求めている力に目を向ける。

大学入試問題を自分で解く
例えば、センター試験問題を記述式につくり変えて自分で答案を書く。

校内でつなぐ

授業公開や授業の見せ合い
同教科だけでなく、他教科の教師にも見てもらうことで、指示や活動のタイミング、発問の仕方などを学ぶ。

同僚との協働作業
定期考査や実力テストの作問、模試の分析、入試問題分析などを通して、ノウハウを共有する。

校外でつなぐ

学校の外の研究会や公開授業に目を向ける
特に小規模校や同科目の教師が複数いない学校では、他校とのつながりが重要になる。

次号 12月号特集「つなぐ教師の教科指導力 後編」では実践事例を紹介

座談会

私が考える教科指導 英語

「What my students want」を常に考えることが指導力を高める

目指すべき授業とはどのような内容か、生徒に力を付ける教科指導とは何か。そして、それを実現させるために、どのようにすれば指導力を上げられるのか。英語科のベテラン、中堅、若手の先生3人に、それぞれの経験を基に教科指導について話し合ってもらった。

「生徒把握」は教科指導の土台となる

狩野　教師になって今年が20年目になります。振り返ってみると、最初の10年は、自分なりの指導の核をつくるために格闘した期間だったと思います。いろいろな先生の授業を見学し、これはと思う指導法を取り入れて、自分なりに工夫を重ねてきました。次の10年は、いかに一人ひとりの生徒に合った指導をするかを模索してきました。教師になりたての頃は授業前の準備にかなり時間がかかりましたが、今はそれなりに教科の知識が蓄積されてきたので、だいぶ短時間でできるようになりました。しかし、同じ内容を教えるとしても、指導の仕方は、学校や生徒が変われば全く違う。今、目の前にいる生徒に合う指導はどのような方法なのかと、試行錯誤を繰り返しています。

島﨑　私は教師になって3年目です。私が以前受け持ったクラスで、音読や個人ワークを中心とした俳句づくりなどを試みたのですが、どれもうまくいきません。ところが「おとなしい生徒たちだけれども、うまくいくかな」と思いつつ取り入れたグループワークとペアワークで、生徒は活発に意見交換し、いきいきと英語を使っていたのです。日頃から生徒の様子やクラスの特性をきちんと見て、実態に合った方法で授業をすることが重要だと実感させられました。

尾崎　同じ普通科の生徒でも、卒業後の進路が就職か進学か、進学でも4年制大か専門学校かなどによって、生徒が卒業までに身に付けなければならない力は異なり、必然的に教えるべき内容も変わります。更に、限られた時間で必要な内容を教えるためには、計画が必要です。今、生徒が目標までのどの段階にいるのかを把握し、更にこれからどれだけ伸びるのかを予測した上での指導が、本来求められているのだと思います。1年生なら3年間、3年生なら卒業までの期間を通した指導計画をきちんと立てる。生徒把握はその土台となります。

生徒の進路希望をかなえる学力をつける

島﨑　高校生が身に付けるべき英語力とは、どのようなものでしょうか。私は、英語はコミュニケーションや視野を広げるための手段だと考えています。英語の習得自体が学習目的ではなく、英語を使って何かすることが大切だと思うので、課題文に関連した記事を配付したり、自己表現の活動をなるべく多く取り入れるようにしています。しかし3年生にな

ると、活動を続けたいけれども、受験に対応した指導が中心となってしまいます。受験指導を踏まえた効果的な活動があると思うのですが……。

尾崎　英語は語学ですから、本来、4技能である「聞く、話す、読む、書く」をバランスよく教えることが大切だと思います。ただ、入試までに合格に必要な力を付けるためには、授業や補習だけでは時間が限られていて、必要最小限になってしまう。私自身、外国人と直接英語で話すときが、今でも一番わくわくします。自分の伝えたいことが相手に通じた瞬間は、何度経験しても感動します。生徒にもそれをたくさん体験してほしい。ただ先ほどの話にあったように、指導では「生徒が何を必要としているのか」、つまり「What my students want」を常に考えることが最も重要であり、「生徒の進路希望をかなえるための学力」が優先されるべきだと思います。

狩野　英語の学習は高校3年間で終わりというものではありません。将来、仕事で英語が必要になるかもしれませんし、海外旅行で使うこともあるでしょう。「卒業したら英語なんて使わないよ」という生徒でも、将来、必要が生じて、あるいは趣味で英語の学習をするかもしれない。そのときのための「土台」をつくっておくことが、高校の英語教育の役割ではないでしょうか。

尾崎　英語学習には決まった到達点がありません。うまくコミュニケーションをしたいと思ったら、学ぶことは限りなくあります。グローバル社会の今は、いつ英語が必要になるかも知れません。だから、卒業後には英語が必要なくなるという生徒にこそ、高校で指導する範囲の基礎・基本は最低限しっかり身に付けて卒業させたいと思って指導しています。

「授業力」と「教科力」の両方が求められる

狩野　私の教育実習生時代に、その高校の先生が「よい先生というのは教科力のある先生だとは思いませんか」とおっしゃいました。当時大学生だった私にはその言葉はピンとこなかったのですが、教師の経験を積んだ今はその言葉の意味がよくわかります。私がこれまでに出会った先生の中で、生徒から信頼を得ている先生は、教科指導力に優れ、ご自身がよく勉強をされています。そうした先生方をお手本にしながら、もっと良い教え方があるのではないかと奮闘する日々です。

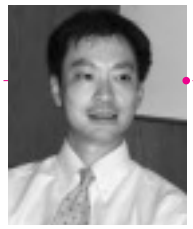
尾崎　指導内容はベースが同じでも、時代と共に変化する部分があります。どんなにたくさん経験を積んだとしても、学ぶ姿勢を忘れてはならないと思います。

島﨑　教師になって3年目の私は毎日が勉強です。中でも、作問は指導力向上に役立っていると思います。勤務校では、定期考査の問題作成などを私にある程度任せてくれます。もちろん先輩の先生方から指摘を受けて何度も直しますが、その理由も時間をかけて根気強く教えてくれます。作問には生徒把握と教科の専門知識の両方が端的に求められるので、苦労はしますが勉強になります。

狩野　教科指導には「授業力」と「教科力」の両方が求められる。どちらが欠けても成り立ちません。「授業力」には、板書や発問の仕方だけでなく、生徒把握や3年間を見通した計画性などが重要な要素になると思います。

座談会参加者プロフィール

長崎県立北松西高校教頭
尾崎健次 Ozaki Kenji
教職歴28年。同校に赴任して1年目。長崎県立上五島高校、長崎県立諫早高校等で教壇に立つ。



長崎県立西陵高校
狩野博臣 Karino Hiroomi
教職歴19年。同校に赴任して13年目。3学年主任。進路指導部。長崎県立対馬高校、長崎県立諫早高校で教壇に立つ。

長崎県立西陵高校
島﨑史子 Shimasaki Fumiko
教職歴2年。同校に赴任して3年目。3学年担任。教務担当。大学在学中に教師を目指し、故郷の英語教師に。

3人の先生が強調していたのは、「生徒の把握」だ。例えば、理系の生徒なら理系科目の学習に時間を割く。英語の学習時間が少ない中で、最低限、合格に必要な力をどう付けさせるのかを考えることも必要だと話す

また、「教科力」は、教えるための知識としてだけではなく、生徒から信頼されるためにも必要です。生徒の質問に対してたびたび答えに窮したり、内容のあやふやな授業をしたりすると、生徒は教師の力量を敏感に察知します。頼りにならないと思った教師の言葉に、生徒は耳を貸したりしないものです。

尾崎　私は、教科指導力に必要な要素は次の四つだと考えています。第1に、高校1年生から3年生までの発達過程を踏まえ、生徒の伸びしろを考えた段階的指導ができるか。第2に、先ほども述べた「聞く、話す、読む、書く」および言語材料のバランスが取れた指導ができるか。第3に、言語教育の必要条件であるトレーニングの時間を確保した指導ができるか。そして第4に、母国語以外の言語を使用し「筋道を立てて考えをめぐらす時間」を確保した指導ができるかです。四つめの要素は、私が英語科での教科指導力で最も重要要素と考えているものです。

英語を学び続ける忍耐力をつけさせる

狩野　生徒が学習を「させられている」と感じるのではなく、「わかる喜び」を実感させながら、しっかりと実力を高めていくような指導をどう実践していけばよいのでしょうか。

尾崎　例えば、私はテストは必ず当日に採点し、翌日には結果を生徒に渡します。生徒が忘れないうちに褒めて、復習を促したいからです。テストのたびにそうすることが、生徒の達成感につながります。知識欲を引き出す一つの方法でもあります。

島崎　私は授業の中で時々ゲームをしますが、単に楽しいゲームで終わらずに「わかった」「できた」と達成感が感じられるような場面を取り入れています。インプットとしての理解→定着→アウトプットとしての自己表現の三つのステップを、小テストや音読、プレゼンテーションなどの活動でレベルを少しずつ上げながら行い、達成感を与えることで生徒の力を伸ばしていくことができると思います。

尾崎　そうした学びへの動機付けは、とても大切です。一方で、英語力を高めるには、単語や文法、構文の学習を地道に繰り返し、量をこなさなければならない。それには、我慢して英語学習を続けられる忍耐力などが必要です。近年の生徒はそういう学習に慣れていない。単調で生徒が無味乾燥に感じるような学習でも、「これは必要な勉強だから」と生徒にしっかり伝え、生徒にも「必要なんだ」と実感させなければなりません。

狩野　課題や追試などを課すと、生徒から一斉に「え～」とブーイングが起きて、不満そうな顔をされます。これが結構辛い。でも、それに耐えて、厳しく指導しなければならない。指導には、情熱と根気も重要な要素なんですよね。生徒にこれだけのこ

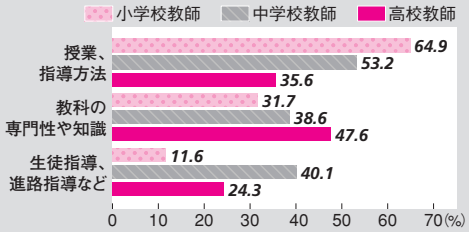
COLUMN 教科指導を取り巻く現状

◎教師の多忙化や教師自身の指導力に関する意識の実態と、生徒の学習実態の変化を示すデータを紹介する。

教師の実態

付けたい力は「教科の専門性や知識」

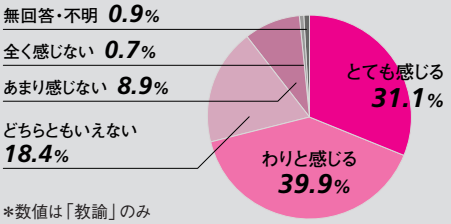
■今後、特に力を付けたいこと



出典／岩手県教育委員会
「教職員の人材育成に関する保護者・教員調査」（2004年）

授業を準備する時間が足りない

■授業の準備時間が足りないと感じるか



*数値は「教諭」のみ
出典／Benesse教育研究開発センター
「教員勤務実態調査（高等学校）」（2006年、文部科学省委託調査）

とを教えよう、理解させようという情熱こそが、教師の原動力だと思います。そして、課題や予習をしてこない生徒にどれだけしつこく付き合えるかという根気強さも必要です。

他教科からも学べることは多くある

島﨑　授業力を高めるために、私はこれまでたくさんの先生に授業を見ていただきました。勤務校では6月と11月に1週間ずつ授業公開を行い、一つは担当教科、もう一つは他教科の授業を見て、評価し合っています。国語の先生からは「専門用語が多すぎて、生徒に伝わっていないことがある」、数学の先生からは「板書が構造的でない。生徒にはわかりにくいだろう」という指摘をいただきました。いろいろな観点からのアドバイスは勉強になります。

狩野　授業公開は実施3年目となりますが、若手だけでなく、ベテランにも指導力を見直すよい機会となっています。その意義は浸透し、授業を見せ合うことは、指導力を高める手立ての一つになるという意識が定着しています。

島﨑　私から頼んで、他教科の先生の授業を見学させてもらうこともあります。指示と活動のタイミングを知りたいときは体育の授業を、発問の仕方を鍛えたいときは現代文の授業を、また、文法の説明やドリルの活用方法を学びたいときには古典の授業を見学しました。他校の先生であっても、授業見学をお願いすることもあります。私のような若手教師にそうした機会を与えてくれる学校に感謝しています。

尾崎　お二人の高校は開かれた学校ですね。教科に関しては、教師同士の価値観の違いがあるので、教科教育について話し合うのは難しい側面があると思います。ただ、例えば、テストの採点をしながら苦手分野の対策をどうすればよいのか、カリキュラムをつくりながら学年の指導をどう組み立てようかと、先生同士であれこれ話をしていると思います。そうした機会をもっと増やせば、互いに学べることがあるのではないでしょうか。

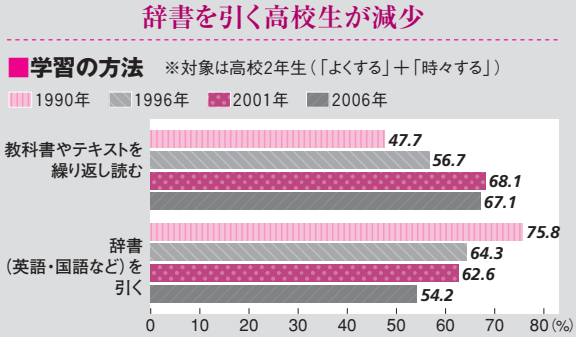
狩野　これまで3校の高校に勤務しましたが、行く先々で同僚の先生方と、どうすれば生徒に力の付く指導ができるのかを模索してきました。「目の前の生徒」という共通の目標を介してなら、教科の話もしやすいかもしれません。

尾崎　教師は数年ごとに異動がありますから、まずはそれが教科指導力を高めるよい機会となるのではないでしょうか。学校が変われば生徒が変わり、それまで培ってきた指導法が通用しなくなることはよくあります。壁に突き当たったとき、では、目の前の生徒のためにどうすればよいのかと考える。どの学校にも教科指導力の優れた教師がいるものです。その先生と話をしたり授業を見せ合ったりして、指導の仕方を真似る。たとえ教科が異なっても、生徒の把握や指導技術で学べる点はあります。そうして指導の引き出しを一つずつ地道に増やしていくことが、教師の技量を上げることにつながると思うのです。

（敬称略）

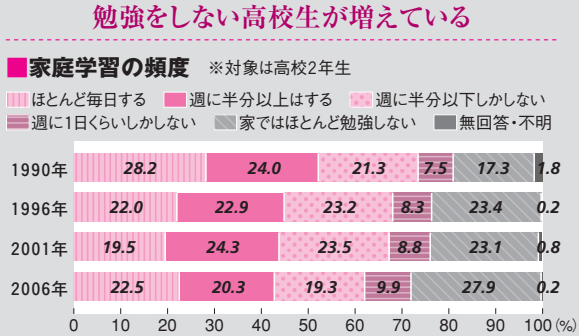
生徒の実態

辞書を引く高校生が減少



出典／Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」（2006年）

勉強をしない高校生が増えている



出典／Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」（2006年）

インタビュー

私が考える教科指導　数学

いま持つ「知識」を使い発想し展開する「考える力」を育てる

徳島市立高校　湊　雅邦先生

湊雅邦先生は、「数学では、公式や定理を覚える必要はあるが、それは考えるための土台。重要なのは、知識を発展させ、展開し、考えていく力」と強調する。いろいろな考え方で公式を理解し、幅広いものの見方をできる力を育てる授業を展開している。

数学を通して多様な発想力を身に付けさせる

「数学は暗記教科なのか、そうでないのか」

これは、数学をめぐる議論で、時折、持ち上がる話題です。私は、ある面では数学に「暗記」は欠かせないと思います。解の公式、正弦定理、余弦定理……、どれも皆、頭に入れておかなければならない定理や公式ばかりです。

単に、「丸暗記すればよいのか」というと、決してそうではありません。前提として、定理や公式をしっかり「理解」していることが重要です。その上で「覚える」。「定着」と言い換えてもよいでしょう。

ただ、数学の場合、覚えた公式を基に「考える」ことが重要になります。身に付けた知識（基本概念）を基に、別の問題を解いたり、応用したりする発想力、展開力を養う。今風にいえば「頭をよくする」ことが、数学の役割だと思います。公式や定理を「覚える（定着させる）」必要があるのは、知識を活用して考えるための土台が必要だからです。

私が数学の指導で最も大切にしているのは、「考えさせる」ことです。その原点は、私が中学3年生のときに教わった数学の先生の授業にあります。

この先生の授業は、とにかく面白かった。生徒に問題を投げかけ、机間巡視をしながら生徒の理解度を把握し、適切なヒントを与えて徐々に解答へ導いていく。そのヒントが絶妙だったのです。少し考えれば解決できるようなヒントを、的確なタイミングで与えてくれる。問題自体も、学んできた知識を活用すれば解けるレベルに設定してあったのでしょう。数学が得意な生徒もそうでない生徒も、皆が授業に参加していたように覚えています。

私自身その授業を通して、いま自分が持つ知識を基にして難しい問題を解く面白さ、考える楽しさを知りました。そして、数学に打ち込むようになったのです。

発問を工夫して生徒に考えさせる

「考えさせる」ことを重視する指導は、初任の定時制高校のときも、現在の進学を中心とした高校でも変わらず意識し続けています。

その意味で、初任校は私なりの指導のスタイルを築く上で貴重な体験となりました。心がけたのは、生徒に自信を持たせることです。定時制高校の生徒は、さまざまな理由によって勉強に打ち込めず、基礎・基本

が身に付いていないため、多くの生徒は学力に自信を持っていません。そのため、生徒が本当に理解できるまで、かなりの時間をかけました。授業で問題を示して、ある生徒に問いかける。わからない場合でも、そのままにして別の生徒を当てたのでは、その生徒は自信ややる気を失うだけです。私は「じゃあ、この問題ならどうだ」と、即座に関連した別の問題や式を出して理解を促しました。

こうした指導を繰り返す中で、私は、ここまで噛み砕けば理解してもらえる、こういう視点を与えれば生徒は自分で考えられるということが、徐々につかめるようになりました（図1）。小・中学校で学んだ知識を使って考えさせることで、基礎・基本の大切さを実感させると同時に、自分にもできるという自信を付けさせるようにしたのです。

わからないことの悔しさ、内心わかりたいと思っていても格好をつけて、それを表に出さないプライドを抱く生徒に対して、どのようにしたら数学の楽しさを伝えられるのか、わかりやすい授業をするためにはどうすればよいのか。定時制高校での4年間に考え続け、実践してきたことが、自分の指導のベースになっています。

徳島市立高校
湊 雅邦 Minato Masakuni
教職歴23年。同校に赴任して19年目。進路指導主事。前任校は徳島中央高校定時制。

図1 考え方の提示の一例

問題

$$\frac{\cancel{(x-1)}(x+5)+(x-1)(x+2)}{\cancel{(x-1)}(x-3)}$$

分子の $(x-1)$ を1つだけしか消さないという誤りがよくある

約分すると

$$\frac{(12+15)}{3}$$

4＋5 となる

生徒が知っている単純な数式を出して考えさせる

$$\frac{\cancel{(x-1)}(x+5)+\cancel{(x-1)}(x+2)}{\cancel{(x-1)}(x-3)}$$

生徒は問題の数式でも分子の $(x-1)$ を2つとも消せることに気づく

多様な解法を見せることで発想力・展開力を養う

問題の本質が理解できるように、ときには一つの問題に必要以上の時間をかけることもあります。例えば、円順列では、${}_nP_n/n$ と $(n-1)!$ の違いを理解するまで何回も話します。難しい公式については、簡単な例を用いて理解させることもあります。区分求積法では、教科書に載っている公式は覚えさせずに「細かく刻んだ短冊（細い長方形）の面積の和」ということを意識して指導します。

また、理解させるときには、「この問題で不等号が逆向きに付いたらどうなるのか」「この数字が負になったらどうか」など、多角的に問題にアプローチすることで、その問題の本質まで理解させるよう努めています。

既に基礎・基本が身に付いている生徒に対しては、生徒の思考の幅を広げる工夫として、別の単元で学んだ定理や公式を用いて解答にたどり着ける問題を出したり、いろいろな考え方で公式を理解するための材料を提示したりしています（P.12図2）。一つの問題から何通りもの解法が導き出せることを見せて、いろいろな発想ができるように頭を柔らかくしていくわけです。数学という教科の要である「頭をよくする」ための訓練といってもよいでしょう。

気を付けるべき点は、成績上位者の中には、教科書を軽んじる生徒もいることです。その場合、さまざまな解法を見せた上で、結局は教科書にある内容が基になっているということを実感できるようにしています。これは、基礎・基本の大切さを実感させることにもつながります。

ただ、1、2年生はあくまで、基礎・基本を徹底的に身に付けさせる時期だと思います。一度に多くのことを教えたのでは混乱するだけですから、解法はあくまでシンプルに、最低限の内容を完璧に身に付けさせることを重要視しています。

作問力を高めることが指導力向上につながる

数学の指導力を高めるために、最も有効な方法は何でしょうか。それは問題を「解く力」と「作る力」を鍛えることです。50点満点で平均30点を目標にテストの問題を作成したにもかかわらず、平均点が20点にしかならなかったのであれば、生徒の理解度に応じた問題作成ができていないということです。生徒の現状を踏まえ、この問題を通してどのような力を問いたいのか、ということを明確にした上で作問しなければなりません。

良い問題とは、授業をきちんと聞いていれば解ける問題です。特別なテクニックを身に付けていなければ解けない問題ではなく、授業で学んだ基礎・基本を組み合わせて考えれば解ける問題です。テストの結果が生徒のそのときの学力をきちんと反映したものになることも重要です。

そうした問題を作成するためには、生徒の現在の力を把握する力も必要です。生徒がどこまで理解しているのか、どこでつまずいているのか、授業で生徒の反応を見たり、机間巡視でノートをのぞいてみたりして、リアルタイムにつかむことが大切です。生徒の解答から学ぶこともあるでしょう。授業を教師のワンマンショーに陥らせないためにも、そうした観察力を養う必要があります。

指導力を高める条件の一つは、教師同士が切磋琢磨していくことです。よい意味での競争心を持つことも、指導改善の大きなモチベーションになり得るのです。前述した作問力についても、私自身、先輩教師から「こんな問題はだめだ」と批判を受けることによってスキルを向上できたと思っています。

「この公式はどのように教えているのか」など、ほかの先生に具体的な指導の方法を質問することがよくあります。そうすることで若手の先生の指導力を高めることができますし、私自身、そこから新しい視点をもらうことも多いです。

まず、教師個人が数学の面白さを忘れず探究心を失わないこと。それを生徒に伝えていくことが指導力の土台です。そして、そうした自分自身を高めていこうとする意識を教師全体で共有することが、指導力向上には欠かせない条件なのではないでしょうか。

図2　数学Ⅱ「図形と方程式」での説明例

◎（1）を学習した2〜3週間後に（2）を学習するが、「❶の公式は（1）の考え方でも（2）の考え方でも説明ができる」と理解することで、思考の幅を広げられる。また、（1）、（2）両方の考え方もより深く理解できるようになる。

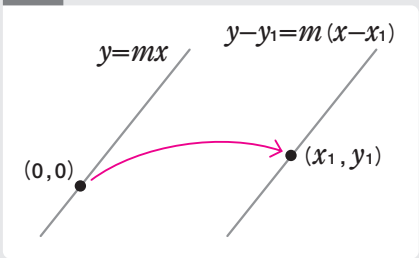
点(x_1, y_1)を通る直線の方程式は

$y-y_1=m(x-x_1),\ x=x_1$ である ❶

という公式について

（1）原点（0，0）を通る直線は
$y=mx,\ x=0$　である
（1）を用いてx軸方向にx_1，
y軸方向にy_1だけ平行移動すると
考えると❶は得られる（図A）。

図A



この（1）以外の考え方を用いても❶の公式を説明できることを指導する

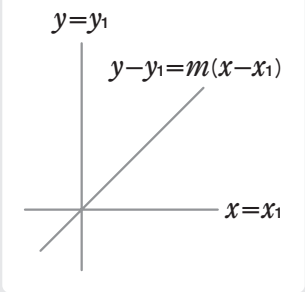
（2）2直線$f(x)=0$，$g(x)=0$　の交点を
通る直線は
$f(x)+kg(x)=0,\ g(x)=0$　である ❷

という公式を指導したあとに、❶について

- 2直線$x=x_1$、$y=y_1$の交点を通る直線（図B）と考えられないか？
- ❶の前半の式で直線$x=x_1$が表せないことと、❷の前半の式で直線$g(x)=0$が表せないことと同じように考えられないだろうか？

と生徒に問いかける。

図B



インタビュー

私が考える教科指導 国語

「言語運用能力」を伸ばす指導がいま求められている

愛知県立一宮高校 栗木晴久先生

栗木晴久先生は、「大学で必要な力と高校の国語科教育はつながっていないのではないか」と自身の体験から疑問を抱き、言語運用能力の育成を目標とした指導スタイルを実践する。テストは能力規準で作問し、習得した知識や技能を活用できる能力が高まっているのかを測っている。

高校で学んできたことが大学で通用しない

学生時代、私は大学での勉強にかなり戸惑った記憶があります。

優れた大学の教師は、学生を徹底的に鍛えます。「このテキストの1章分を、来週までに原稿用紙3枚に要約してきなさい」「この問題について、4000字のレポートを書きなさい」といった課題をどんどん与えていきます。ところが、入学当時の私は、テキストを要約しようにも、どのように読めばよいのか、どのように書けばよいのか、全く見当がつきませんでした。ともかく課題をこなして提出するのですが、初めのうちは全くうまくいきませんでした。しかし、読むことと書くことを繰り返しながら、大学で求められる言語運用能力を少しずつ身に付けていったのです。

このときに痛感したのは、「高校までの国語の勉強が、大学では通用しない」という事実でした。もちろん、中等教育と高等教育との間に差があるのは当然です。しかし、私が感じたのは、単なる「段差」では済まされないものでした。

大学の学びで求められる言語運用能力とは、論理的に書かれた文章を的確に読む力、そして書く力です。ところが、私は、高校までの国語の授業で、論理的な文章を読む力、書く力を鍛えるための指導をさほど受けていませんでした。大学で論理的な言語運用能力が必要とされているのであれば、本来なら高校でもその能力を育てるための指導が必要なだけ行われるべきです。

私は、大学教育と高校の国語科教育がうまく接続されていないのではないか、と感じながら教師になりました。

国語科教育において、文学的な文章や韻文を味わい、情景や心情を捉える力を生徒に身に付けさせることが、人格形成の上で不可欠なのは言うまでもありません。しかし、もう一つの柱として、論理的な文章を読みこなし、趣旨や論理構成を理解する力を生徒に身に付けさせることも、同じように重要です。ところが、従来の国語科教育は、前者に偏っていたのではないかと思います。

実は1982年に施行された学習

指導要領以降、国は「文学教育としての国語」だけではなく、「言語の教育としての国語」を重視すると、明確に打ち出し続けています。また、センター試験や国公立大の個別試験の国語の問題を少し丁寧に分析すると気づくことですが、大学入試においても言語運用能力を測る問題が数多く出題されています。

言語運用能力の育成は、国の方針であり大学の要請でもあるのに、肝心の高校教師が十分にそれを認識し実践していない。これは、今の国語科教育の大きな問題だと思うのです。

普段、学校現場で忙しく働いていると、どうしても日々の授業や指導にばかり追われがちです。しかし、「自分の担当教科では、今、何をどのように教えることが求められているのか」を知るために、中央教育審議会の答申や学習指導要領を読み込むなどして、国の教育政策に関心を持つことが大切です。国立教育政策研究所のウェブサイト上の読解力に関する資料も参考になります。

また、「大学教育が高校教育に何を求めているのか」を把握するには、大学入試問題を自分で解いてみることです。例えば、評論のセンター試験問題を記述式問題につくり変えて、自分で答案を書いてみると、「大学教育が、高校卒業までに生徒に身に付けておいてほしいと考えている学力は何か」が見えてきます。国語科教育が目指すべきものと、大学入試との間に対立や矛盾はないことにも気付きます。

問題集は「能力を鍛えるための手段」ではない

生徒の言語運用能力を育むために、国語では具体的にどのような指導をすればよいのでしょうか。

私は、「質の高い評論文を数多く読ませること」と「論理的な文章を書く機会を増やすこと」に尽きると考えます。ただ、「数多く読ませる」「書かせる」というのは、単にたくさんの問題文に当たらせるという意味ではありません。

先日、私は予備校の先生と接する機会がありました。予備校の場合、預かった受験生を指導できる期間は1年程度です。時間が限られているために、その受験生が現状で持つ言語運用能力をいかに試験の点数に変換していくか、という技術を教えることで精一杯だと話していました。得点力の大前提となる言語運用能力を伸ばすことに関しては、その方向性を指し示すことしかできていないというのです。

一方、高校教育には、3年間という時間が与えられています。生徒が現状で持つ言語運用能力を前提とした指導ではなく、言語運用能力自体を「伸ばす」ことができるのです。

ところが、多くの進学校で行われているのは、大量の問題集を生徒に課すことです。中には、2年生の早い時期から、教科書主体の指導から問題集主体の指導に移行する高校もあります。そして、「丸2年間も演習問題に取り組ませたのに、結局、生徒の学力はあまり伸びなかった」という結果になりがちなのです。

しかし、これはある意味、当然の結果です。問題集に取り組ませることは、「言語運用能力を点数に変換する技術を身に付けること」にはなっても、「言語運用能力自体を伸ばすこと」には直接つながらないからです。

そもそも、国語の問題は「能力の状態を測定するための手段」であり、「能力を鍛えるための手段」ではありません。確かに、優れた問題は能力を測ると共に、能力を鍛えてもくれるでしょう。しかし、「能力の育成にはならない」と断言してもよい問題が数多くあります。本来の目的が異なるものを用いて、言語運用能力の育成を図っても非効率的です。

また、問題集を順番に解かせる学習方法では、一つひとつの文章が内容的な連関を持たないために、生徒が議論の本質をつかめないまま、ただ設問に答えていくという学習に陥りかねません。文章の構造や、筆者がどのような論理を展開して、どのような主張をしているかを的確に読み取り理解する力を生徒に身に付けさせたいと思うのなら、細切れの問題文ではなく、一定のまとまりのある文章を一つのテーマについて複数読ませる必要があります。

生徒に数多くの文章を読ませ、書かせることによって、言語運用能力を育成しようとするときに重要なのは、3年間を見通す力です。「高校卒業時に、生徒はこういう能力をこの程度身に付けている」というゴー

ルを見据えた上で、どの時期にどのような文章を読ませたり書かせたりするのか、学年ごとの年間計画を立て、教材を選び、配置するのです。

例えば、本校では、現代文分野の学習指導で育成すべき言語運用の基礎能力を整理して明文化しています（図）。3年間でこれらの能力を確実に高めさせるために、「教科書のそれぞれの教材は、どういった能力を伸ばす上で効果的に活用できるか」「効果的な教材の配置はどうあるべきか」ということを考えながら教材を並べ、生徒の言語運用能力がスパイラルに伸びていくことを期しています。

更に、授業と教科書だけでは読む量が少ないため、家庭学習の教材として評論文の選集を与えて授業と関連する形で読ませ、要約を書かせています。また、生徒には新書レベルの書物を読みこなせるようになってほしいので、長期休暇等には文芸作品だけでなく新書を課題図書として読ませています。

愛知県立一宮高校
栗木晴久 Kuriki Haruhisa
教職歴16年。同校に赴任して8年目。進路指導部。愛知県立豊田西高校、愛知県立松平高校で教壇に立つ。

言語の運用能力規準でテストを作問

私は、国語、とりわけ現代文で重要なのは、「知識規準」ではなく「能力規準」で授業を組み立て、生徒を指導していくことだと考えます。

進学校に入学する生徒の中には、中学生のころ、「国語は暗記科目だ」と捉えていた者も多くいます。授業中の板書の内容を丸暗記すれば、定期考査では高得点が出せるからです。しかし、未習の文章に出合ったときに、授業で習得した知識や技能を活用してその文章を読みこなせてこそ、言語運用能力が高まったと評価できるのです。

ですから、授業では、どの教材を使い、どのような言語能力を高めさせたいのか、どう指導すればそれを鍛えられるのかを、教師が意識しながら臨むことが重要です。

そして、定期考査の作問でも、その能力の状態を規準とした問題にすることが重要です。授業中に生徒が習った教科書の文章をそのままテストで用いるのではなく、その作品の原典を手元に置き、教材化されている以外の文章を用いて作問します。それによって、授業で習得した知識や技能を活用する能力が高まっているのかを測るのです。

「能力規準」で指導と評価を一体化する必要は、校内実力テストにおいても同じです。入試問題や問題集から問題を抜き書きするのではなく、教師自身がテキストを探し、ゼロから問題をつくることが大切です。普段の指導内容を前提に、生徒の習熟度や測りたい言語能力をイメージしながら、オリジナルの問題を作成するのです。

もちろん、定期考査や校内実力テストで能力規準の作問をすることはかなりの負担になりますから、教師間で作問を分担し、互いに問題をチェックすることが大事です。「この設問の仕方では、生徒のどのような力を測ろうとしているのかが明確ではない」「空欄補充問題をつくるなら、ここに空欄を設けた方が効果的ではないか」というような相互批評によって、教師個々の作問力が向上します。

評価能力の向上は、指導力の向上です。同時に、協働作業を通じて、生徒にどのような言語運用能力を身に付けさせたいのか、教師間で共有することも促進できます。また、作問だけでなく、自作教材の規準化と蓄積を図ると、学校としての指導に厚みと連続性が生まれます。

図 一宮高校が現代文で育成を目指す日本語運用の基礎能力

- **内容把握能力**
- **抽象化能力**（要約力、抽出力）
- **対象化能力**（活用力、解釈・批評力）
- **論理性**（読解、思考、表現における）
- **表現能力**（書くことにおける）
- **知識、教養**
- **速読能力**

インタビュー

私が考える教科指導 公民

多面的な見方を提示し考えさせる授業で「社会への目」を育てる

東京都立国立高校 小原孝久先生

「高校時代は将来を見据える時期にあり、そのために社会を知る必要がある。社会を学ぶ公民が果たすべき役割は大きい」と話す小原孝久先生。客観的、多面的な考えを提示し、生徒が意見を述べる機会を設けて、考える力を育てようとしている。

社会に目を向け「考える力」を付けさせる

公民の授業を通じて、私が生徒に身に付けさせたいことは四つです。

①社会に興味・関心を持つ
②考える力、表現できる力を付ける
③問題を多面的・客観的に見、前向きに社会を批判できる力を付ける
④社会に目を向けられる人となる土台として、「自己への目」を培う

高校時代は、将来の生き方を見据えるべき時期にあたります。そのためには、自分がこれから生きていく社会が、どのような仕組みで動き、どのような課題を抱えているのかを知らなくてはなりません。社会問題について自分で考え、意見を表明できる力を伸ばすことも重要です。

社会は変わっていくものです。いまは主流である主義や主張が絶対的なものでないことは、歴史を見れば明らかです。社会的な問題は、一元的な見方では本質に迫れない複雑な背景や側面を持つ場合がほとんどです。そこで求められるのが、問題を多面的・客観的に見ることができる力と、前向きに社会を批判できる力を持つことです。

もう一つ重視しているのは、「自分を見つめる目」を培うことです。私の経験では、しっかりとした「社会への目」を獲得している生徒は、自分自身に対してもきちんと目を向けることができています。社会に対して自分なりの視点を持つと同時に、社会の中で自分はどう生きていくのかをしっかり見つめられる生徒を育てたいと考えています。

ハートの実現にはスキルが不可欠

ここまでの話は、「公民の授業を通して、こんな生徒を育てたい」という、私のハート（思い）にあたります。教師には、なぜそれを教えたいのか、伝えたいのかという「熱い心」（ハート）と、それを伝えるための十分練られた「技術・方法」（スキル）が必要です。例えば、考える力や表現する力の育成には、スピーチやグループ討論、小論文作成などを授業に効果的に盛り込むことが重要ですが、生徒にいきなり「話す」「書く」を求めてもできません。

スピーチを例にしていうと、私は、最初の授業でスピーチの仕方を指導し、2回目の授業で8人くらいの生徒に自由なテーマでスピーチをしてもらいます。このとき、大切にしているのは、生徒それぞれの長所に目

を向けて、一人ひとりのスピーチを徹底的に褒めることです。褒めることによって、話すことに対する生徒の心理的ハードルを下げ、また、その授業が一方通行なものでないことを伝えます。こうして、3回目以降の授業では、毎回2人ずつスピーチをさせています。

スピーチやグループ討論というと、「生徒に一定の力がないと成立しない」と考えがちです。けれども、これは教師の言いわけではないでしょうか。事実、私は学力的に厳しい高校に勤務していたときにも、このスピーチを行っていました。

もちろん、工夫は必要です。例えば、ある社会問題について討論するのなら、まず生徒全員に賛成・反対などの意見を小さい紙に書いてもらい、それらの紙を整理して模造紙に貼らせてから討論させています。そうすれば、生徒は、模造紙に書かれた意見を参考にしながら、自分の意見を改めて考えた上で、話したり、発表したりできるのです。

このように、スピーチやグループ討論を意義のある活動にするためには、教師に細かな工夫が不可欠なのです。

多面的・客観的な見方の育成のためには、できるだけ多様な資料を生徒に提示しています。戦争をテーマにした授業では、原爆投下問題をアメリカ側と日本側の双方の立場から考えさせる視聴覚教材を見せます。あるいは太平洋戦争を、加害者の立場と被害者の立場の両方の視点から考えさせる資料を配付します。

事実を多面的かつ客観的に捉えた上で、自分なりの意見を形成できる生徒を育てたいのです。ここでも、生徒の思考を揺さぶったり、新しい視点を生徒に見せたりといったスキルが、教師には求められます。

授業で使う資料や視聴覚教材の準備にはかなりの時間を割きます。授業時間内に報道番組を見せたあと、討論の時間を確保しようと思ったら、番組の編集作業が必要となります。苦労が多くても、生徒が強い関心を示し、あとの討論が盛り上がったときは、やはり嬉しいものですね。

国公立大の個別学力試験では、公民だけでなく、国語や英語などの教科でも、「社会に対するものの見方」や「自分なりの考え方」が問われる問題が多くなりました。生徒には「これは受験対策にもなる」と話しながら取り組ませています。

教師1人ではハートもスキルも伸びない

生徒に学力が付く指導というのは、「なぜ学ぶのか」ということを生徒が理解できる指導、つまり、学びの動機付けをうまくできる指導だと思います。ですから、私自身は、知識を付ける指導と共に、「受け身でない授業」「一方通行ではない授業」「考える授業」「発言する授業」などを取り入れています。大事なのは、授業にさまざまな工夫、興味深い扱い、深い内容などがあり、授業を通して生徒の心の琴線に触れる形で学ぶことへの動機付けがなされることです。

私は、「どうしたら授業で生徒を学びへと動機付けできるか」を常に考えながら、指導法を磨いてきました。ほかの先生のちょっとしたスキルでも自分のものにしたいと思い、公開授業や研究会にはできるだけ参加してきました。

スキルアップの上で、同僚の存在は大きかったです。若いころの勤務校の同僚とは、さまざまな情報を交換し合い、共同でグループテーマ学習発表を行う授業をしました。スピーチやグループ討論を指導する基本的なスキルは、あのころに身に付いたと思います。

今の現場には、同僚との「共同」や「協働」ができる機会が、非常に限られていると思います。授業を見せ合うのが難しいという雰囲気は、変えていく必要があると思います。ハートと共にスキルを伸ばすために、互いに学び合いながら、共有できる関係を築き上げていくことが不可欠です。

東京都立国立高校
小原孝久 Kohara Takahisa
教職歴32年。同校に赴任して5年目。2学年担任。東京都立豊島工業高校、東京都立駒場高校等で教壇に立つ。

インタビュー

私が考える教科指導

理科 物理

考え方のストーリーを重視し、物理現象の本質を見極める力を培う

栃木県・私立文星芸術大附属高校　増田信夫先生

知識は覚えていなくても、インターネットですぐわかる。そうした時代に必要なのは、知識を活用し分析する力なのではないか……。増田信夫先生は「物理の本質を理解し論理的に考えることで、問題は解ける。その過程で養われる思考力こそが生徒に身に付けさせたい力」と話す。

生徒の目線に立った授業を他校の先生と磨き合う

私が最初に赴任したのは、分校から本校になったばかりの小さな高校で、物理教師は私1人でした。指導力を高めようにも、身近に手本となる先生がいませんでした。私はすぐに栃木県高等学校教育研究会の理科部会物理分科会に参加し、他校の先生の指導ノウハウを吸収するよう心がけました。

研究会には年2回の研究授業があり、早くも2年目に私の番が回ってきました。駆け出しの私がベテランの先生の前で授業をしようというのですから、ものすごいプレッシャーでした。

そこで、前年に研究授業を見学して感動した先生を訪ね、アドバイスを頂きました。授業に関する具体的な手法も勉強になりましたが、それ以上に刺激を受けたのは、先生の授業に対する姿勢です。自分の授業を受けて、生徒は何を考えるか、どう感じるか、この説明で15～18歳の子どもが理解できるのか……。常に生徒の目線で、説明の仕方や授業の進め方に思いをめぐらせていることに敬服しました。

振り返ってみると、この体験が私の教科指導の原点なのだと思います。以来、生徒の立場に立った授業はどうあるべきかを、常に考えてきました。物理現象は実際にその動きを見せないことには、本当の理解は得られません。言葉で説明しても、イラストなどで目に見える形にしても、所詮は机上のもの。ですから、身近なものを活用して、実験装置を製作し、観察・測定させ、より身近で本質的な捉え方ができるよう、指導を工夫しました。それは公立高校を定年退職し、私立校の教壇に立つ今でも追究し続けています。

物理現象の本質に授業でいかに迫れるか

これまで多くの教師の授業を見てきた経験から感じるのは、授業が教師の独演になっている場合が多いことです。特に進学校では、大半の生徒が基礎・基本を身に付けているため、授業が進めやすい。生徒が黙って聞いているので、理解していると思い込み、通り一遍の説明や板書で済ませたり、難解な説明を押し付けたりしてしまうのです。

また、問題の量をこなすことで学力が高められると考えている教師も多くいると思います。知識を習得することは大切ですが、今はインターネットや電子辞書などで簡単に調べられます。本当に必要なのは、知識

そのものを身に付けることよりも、知識を活用し分析する力ではないでしょうか。

物理を指導する上で重要なのは「基礎・基本の概念を形成すること」にあると考えます。そのためには、「考え方のストーリー」を重視していくことです。この過程で身に付けられる論理的思考力や直観力、洞察力は、文系・理系を問わずあらゆる職業に必要です。それを体得させることこそが、物理教育の使命なのではないでしょうか。

そのために大切なのは、いかに授業の中で物理現象の本質に迫れるかということです。なぜその現象が起こるのか、自然界でどのような意味を持つのか、現象の本質まで掘り下げて生徒に理解させることが重要です。

例えば、運動方程式のma=FのFは単に「力」と書かれているときがありますが、正確には、外からその物体に対して働く複数の力を一つにまとめた「合力」のことです。私は生徒がそのことを理解するまで2、3時間はかけて説明しています。

基礎・基本に時間をかけすぎたために、演習時間が不足したり、より難解な事項を説明できなかったりすることもあります。しかし、基礎・基本をなおざりにして先に進んだとしても、深い理解には到達できません。基礎・基本さえきちんと押さえておけば、応用的な事項も理解できるようになりますし、物理現象の本質に気づいた生徒ほど主体的に学習に取り組むようになるのです。物理が得意な生徒も苦手な生徒も、それは同じです。

補習で学習量を増やしても成績は伸びない

私が物理の本質を理解させることの大切さに気づいたのは、40代半ばでした。難しい演習問題を解かせても補習で学習量を増やしても、思うように模試の成績が伸びない。教科書だけで本当に生徒の力は伸びるのかと考え、授業で試行錯誤した結果、思い至ったのです。

教科書をなぞったり、小手先の演習をさせたりするだけでは、ある程度成績は伸びても、それ以上突き抜けることはできません。教師が手取り足取り教えるのではなく、物理現象の本質に気づかせ、物理に対する関心を高めることで、生徒が自律的に学びに向かうよう促していくことが大切なのです。

また、授業では、今、学んでいる単元が社会の中でどのような役割を担っているのか、卒業生は高校時代に学んだ物理の知識をどのように生かしているのかを、折に触れて話しています。物理と社会との接点や、将来の自分自身の姿を思い描かせることで、物理に対するモチベーションを高めていくのです。

物理に限らず、指導の効果を左右するのは、生徒と教師との信頼関係です。いくら熱弁を振るったとしても、教師の本気が伝わらなければ、虚飾の部分を見透かされて、生徒は決してついてはきません。日常生活も含めて、常に生徒と本気で向き合う姿勢が、真の指導力につながると思います。

規模の小さい学校では、校内に同一科目の教師が1人しかいないことも多いと思います。指導力を高めていくためには、学校の外に目を向け、手本となる先生を見つけることが不可欠です。

栃木県・私立文星芸術大附属高校
増田信夫 Masuda Nobuo
教職歴43年。同校に赴任して6年目。英進科教諭。栃木県立宇都宮東高校、栃木県立烏山高校等に勤務。

次号予告 12月1日発行予定

つなぐ 教師の教科指導力 後編

教師個々の教科指導力は、どのようにしてつなぎ、高めることができるのだろうか。具体的な事例を基に考える。

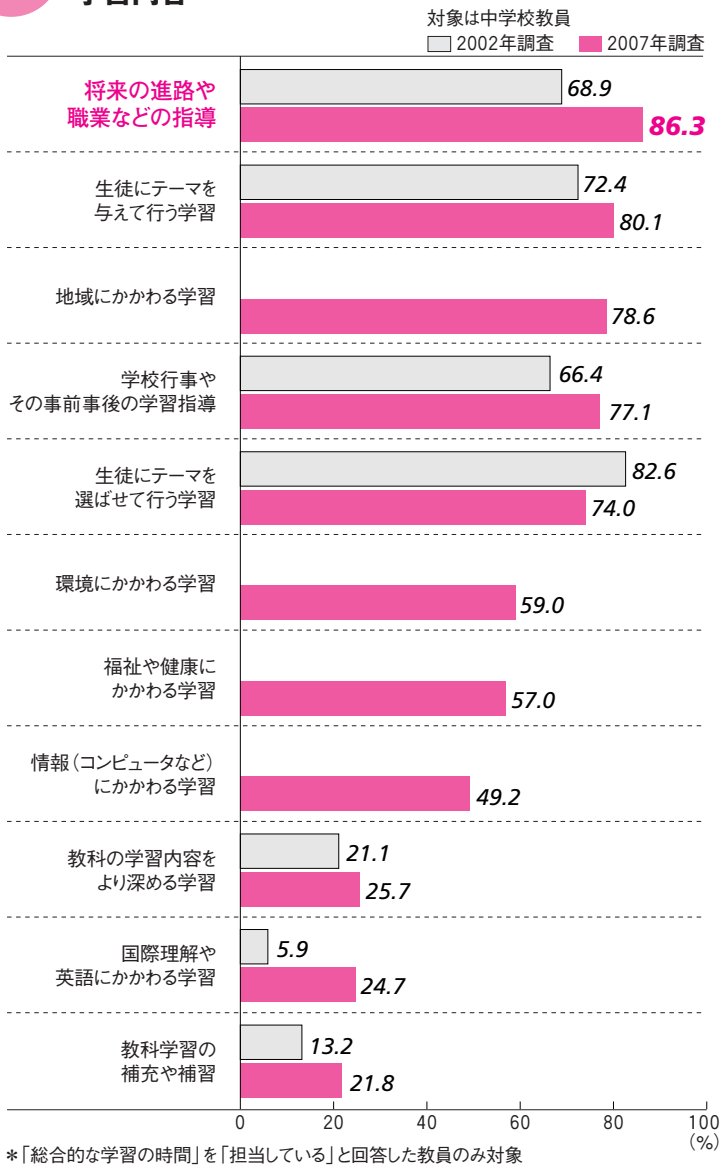
視点1 校内でつなぐ
・授業を見せ合うことで、指導力を高める
・模試などの分析・評価を共有し、指導力を高める

視点2 校外でつなぐ
・行政主導の研修を活用して指導力を高める
・学校間での共通の問題意識から生まれた研究会を通して、指導力を高める

将来の進路や職業などをテーマにした総合学習が増加

Benesse教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より

図 「総合的な学習の時間」の学習内容



＊「総合的な学習の時間」を「担当している」と回答した教員のみ対象
＊数値は「よくしている」＋「ときどきしている」の合計
＊「地域にかかわる学習」「環境にかかわる学習」「福祉や健康にかかわる学習」は、07年調査でのみ尋ねている
＊「情報（コンピュータなど）にかかわる学習」は02年調査と尋ね方が異なるため、07年調査の数値のみ載せている

出典◎『第4回学習指導基本調査』／調査時期◎02年調査：02年9～10月、07年調査：07年8～9月実施／調査方法◎02年調査：学校通しによる質問紙調査、07年調査：郵送法による質問紙調査／調査対象◎公立中学校の教員02年調査：3,388人、07年調査：2,109人／抽出方法◎02年調査：北海道・岩手県・宮城県・新潟県・石川県・群馬県・東京都・山梨県・愛知県・大阪府・兵庫県・岡山県・福岡県・熊本県、07年調査：全国の公立中学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に学校を抽出。＊分析対象は、国・社・数・理・外国語の5教科のいずれかを担当する教員のみ

進路学習を行う中学校が増加傾向

「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」は、中学校でどのように実施されているのだろうか。図は、導入当初の2002年と、導入から5年経った07年に、総合学習での活動内容について、中学校教師に尋ねた結果だ。

07年調査で最も多かったのは「将来の進路や職業などの指導」だった。02年調査よりも約17ポイント増え、9割近い中学校が進路学習を行っていることになる。

中学校では、「キャリア・スタート・ウィーク」という、職場体験によって生徒の勤労観・職業観を育てる取り組みが行われている。職場体験や事前事後学習は総合学習で行われ、内容は高校の進路学習と重なる部分が多い。高校では、中学校との連続性を考えた進路指導がより重要になるだろう。

中学校での活動内容を把握し、生徒が培ってきた力を伸ばす

中学校の総合学習で行われるテーマとしては、「進路学習」以外にも、「地域」「環境」「福祉」などが挙げられた。これらは、高校の総合学習でもよく行われるテーマである。そのため、重要なのは、自校の生徒が中学校時代にどのような取り組みをしてきたのかを把握することだ。もちろん、中学校によって取り組みは異なるため、高校での活動の足並みをそろえることは難しいかもしれない。しかし、生徒自身の裁量で活動しやすい総合学習は、自主性を育む場にもなる。生徒や中学教員へのヒアリングなどによって、生徒が中学校で培ってきた力を更に発展させるような活動のヒントが得られるのではないだろうか。

中学校の現状は
http://benesse.jp/berd/
または ベネッセ　研究 で 検索
Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトをご覧ください
→ HOME ＞情報誌ライブラリ（中学校向け）

沖縄県立 **那覇国際高校**

進路検討会の導入と改善

「教師全員で生徒を見ようという意識が、
前向きな指導に、そして進路実績に結び付いたのだと思います」

▶▶▶ P.22

指導変革の軌跡

そのとき教師は、そして生徒はどう変わったか

茨城県立 **古河第三高校**

進学校への再起

「生徒指導と進路指導、そして学習指導がうまく噛み合って、学校に活力を与えています」

▶▶▶ P.26

三重県立 **朝明（あさけ）高校**

接続を重視したキャリア教育

「面談で沈黙を大切にするようになってから生徒の心の奥まで入れるようになりました」

▶▶▶ P.30

沖縄県立
那覇国際高校

進路検討会の導入と改善

進路検討会が進路部と学年団の密な連携を生み出し生徒の躍進を支える

◎「自主」「敬愛」「飛躍」の校訓の下、国際化・情報化社会で活躍する人材の育成を目指す。ALTや国際会議室を活用した語学教育の充実、中国語・スペイン語等の第２外国語の選択履修、海外研修、ボストン（アメリカ）への短期留学など国際交流活動も活発だ。

設立
1998（平成10）年

形態
全日制／普通科・国際科／共学

生徒数
1学年約360名

08年度進路実績
国公立大は、筑波大、千葉大、東京学芸大、横浜国立大、金沢大、大阪大、岡山大、九州大、琉球大、北九州市立大、沖縄県立看護大などに171名が合格。私立大は、立命館大、関西大、関西学院大、福岡大、立命館アジア太平洋大、立教大、早稲田大などに延べ165名が合格。

住所
〒900-0005
沖縄県那覇市天久1-29-1

電話
098-860-5931

Web Site
http://www.nahakokusai-h.open.ed.jp/index01.html

実践のポイント

1. 年3回の進路検討会で情報を共有し、生徒に多面的に働きかける
2. 進路ガイダンス部と学年団との連携を密にし、進路情報の共有を徹底させる
3. 学年集会や進路便り、教師の声かけで、生徒に進路情報を頻繁に提供

進路検討会で情報を共有し生徒への声かけに生かす

２００７年３月、沖縄県立那覇国際高校の３学年団職員室は安堵（あんど）に包まれた。過去最高である前年の実績には及ばなかったものの、国公立大現役合格者は１４４人。この年の３年生は、前年に比べて模試の平均偏差値が２ポイントほど下回っていただけに、喜びもひとしおだった。

当時、３学年主任だった西原誠先生は、「ここで実績が落ち込んだら勢いがそがれ、学校全体が停滞しかねないという危機感がありました。学年団と進路ガイダンス部が連携を密にして情報を共有し、生徒にとって最善の進路先はどこか、そのために何をすべきかを緻密に考えたことが、実を結んだのだと思います」と振り返る。

この実績を支えたのは、07年１月に同校では初めて実施した進路検討会だ。進路ガイダンス部と学年団が一堂に会し、センター試験の結果を踏まえ、生徒の志望や実力にふさわしい進路先を絞り込んだ。学年団全員で生徒の情報を共有し、自信をなくしかけている生徒には、担任だけでなく進路や教科担当の教師も声をかけ励ました。複数の教師からアドバイスや励ましを受けて自信を深めた生徒も多かった。

現３学年主任の辻上（つじがみ）弘子先生は、進路検討会は教師にも好影響を及ぼしたと話す。

「模試の成績が芳しくない学年だったので、

担任個々の頑張りだけでは実績は出せないという危機感がありました。検討会を通してベテランのノウハウや教科担当からの専門的なアドバイスを得られたのは大きかったです。一人で抱え込まずに、皆で生徒を見ていこうという気持ちが、前向きな指導を実現させたと思います」

成功にあと押しされて進路検討会を拡充

それまで同校の進路指導は、教師個々の指導力に負うところが大きかった。進路ガイダンス部主任の伊志嶺嘉典（いしみねよしのり）先生は、「例えば、学部・学科について、ある分野には詳しいけれども、別の分野は適切な指導ができない場合もありました。学年団全員がアドバイザーになることで指導の充実を図りたいと考えました」と導入の意図を語る。

07年3月の合格実績を受けて、07年度には進路検討会の定着を図った（図1）。

実施は7月、12月、1月の年3回。7月は2年生1、2月の進研模試と5月の校内実力テストの結果、および5月の二者面談で話し合った内容を踏まえ、志望校と実力のマッチングを検討する。検討対象は、高い志望にこだわる生徒、自信がなく志望を下げようとしている生徒だ。12月は9、10月の模試結果を基に志望校の確定、1月はセンター試験の結果を踏まえて最終出願先の絞り込みを行う。かける時間は、7月、12月が1日3クラス各1時間で3日、1月は8時間ほどで全生徒のデータを検討する。

参加する教師の幅も広げた。7月は進路ガイダンス部、3学年の担任・副担任、国・数・英の教科担当が参加。12月は更に理科の教科担当が加わり、1月は管理職も含めて多くの教師が参加する。「06年度の3年生が予想以上の実績を上げたため、進路検討会の有効性が教師の間に浸透しました。教科担当に参加をお願いするときも、皆、賛同してくれました。教科担当は、教科指導の必要な生徒にすぐアドバイスできるよう、指導方法のアドバイザーとして位置付けられています」と、西原先生は振り返る。

07年度3年生では、2年生の1月にも進路検

沖縄県立那覇国際高校
伊志嶺嘉典 Ishimine Yoshinori
教職歴17年。同校に赴任して5年目。進路ガイダンス部主任。「多少の困難に負けない、打たれ強い生徒を育てたい」

沖縄県立那覇国際高校
辻上弘子 Tsujigami Hiroko
教職歴19年。同校に赴任して9年目。3学年主任。「進路実現に向け、学力と人間力のバランスの取れた生徒を育てたい」

沖縄県立那覇国際高校
西原　誠 Nishihara Makoto
教職歴20年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「生徒の志望を実現するために、教師同士の連携を深めていきたい」

沖縄県立那覇国際高校
上江洲隆 Uezu Takashi
教職歴18年。同校に赴任して4年目。教務主任。「生徒には『守・破・離』の心構えを伝えていきたい」

図1　進路検討会の流れ

2年生

1月　進路検討会（07年のみ実施）
志望の曖昧な生徒を中心に、地方国公立大、私立大などの大まかなくくりで検討。3年生に向けて、すべきことを明らかにし、生徒にアドバイスをする。
▼
進研記述模試
▼
2月　進研センター試験早期対策模試

3年生

5月　実力試験・二者面談
▼
6月　進研マーク模試
▼
7月　進研記述模試
▼
第1回進路検討会（3日間）
1・2月の模試結果、5月の試験・面談結果を踏まえて、担任が指導に不安を感じる生徒を中心に検討。この時点では、志望を絞りきれていない生徒も多い。
▼
三者面談
▼
9月　進研マーク模試
▼
10月　進研記述模試
▼
二者面談
▼
11月　進研マーク模試
▼
12月　第2回進路検討会（3日間）
9・10月の模試結果を基に志望大をほぼ確定。
▼
1月　センター試験
▼
第3回進路検討会
センター試験の結果を踏まえて、最終出願先を絞り込む。

討会を実施。地方国公立大志望、私立大志望といった大まかな範囲で検討を行い、生徒に3年生に向けてのアドバイスをした。この学年は、国公立大現役合格者数171人と、過去最高の進学実績を上げた。

「実は、今年の3年生は、行事の関係で2年生のときに進路検討会を開けていません。そのため、3年生の初めての模試で志望校がきちんと考えられておらず、指導が遅れていました。2年生での進路検討会は必要だと感じました」（伊志嶺先生）

進路検討会を始めて今年で3年目だが、取り組みの検証と改善を繰り返していることも、検討会が効果的に機能しているポイントだろう。

タイムリー性を重視した情報を頻繁に発信し、生徒の信頼感を高める

このように、進路検討会成功の背景には進路ガイダンス部と学年団との密な連携があるが、進路検討会以外でも両者が連携し、同校の躍進を支えている。例えば、進路ガイダンス部主催の小論文講座や、希望制の外部模試などへの生徒の申し込み状況は、その都度、担任に伝える。担任は必要ならば面談で参加を促し、模試の申し込みをしていない生徒に声をかける。

進路ガイダンス部が学年会に参加する機会も増えた。時期ごとに生徒に周知すべきことを伝え、生徒の気持ちが緩みがちな時期を見計らい、声かけを学年団に依頼する。

学年団からも進路ガイダンス部に対して、学年集会での講話を積極的に依頼するようになった。「進路ガイダンス部と学年団が融合し、一つになりつつあることを感じます」と辻上先生は話す。

月1回の学年集会は、かつては生活指導に重点を置いていたが、今は進路情報を提供する場となった。進路ガイダンス部から模試の結果やアドバイス、志望校選択にあたっての注意点など、時期に応じて生徒に必要な情報を伝える。

進路ガイダンス部が発行する進路便り『飛躍』は、生徒を鼓舞するための重要なツールだ（図2）。推薦入試の流れやセンター試験の心構え、進研模試の詳細なデータなど、学年集会では伝えきれないタイムリーな情報を盛り込む。データを使うときも、全国や実績を出した過年度の学年と比較するなどの工夫を凝らす。発行はほぼ毎日で、年間230～240号にもなる。更に3年生には、辻上先生が学年主任の立場から時々の思いをエッセイ風にまとめた『学年便り』も、ほぼ毎日配付する。「激励の言葉を投げかけることで、生徒の教師への信頼が高まっていると感じます」と、辻上先生は話す。

学年集会や学年通信の目的は、生徒の意欲を高めるだけではない。「模試の結果を踏まえて今の生徒に必要なことは何か、生徒が焦りを感じ始める時期にはどのような声かけが必要か。若手教師にとって、進路ガイダンス部やベテラン教師から学ぶべき点は多くあります」と辻上先生は説明する。担任間の指導力の差を補う上でも、欠かせない取り組みになっている。

今後は、体系的な進路指導体制を構築する予定だ。生徒向けの進路計画表を基に、この時期

図2　進路便り『飛躍』

ほぼ日刊で生徒に配付する進路便り。07年度は287号まで発行した。進研模試やスタディーサポートの結果などの諸データのほか、長期休暇の過ごし方、学習スタイル構築のためのアドバイスなどを盛り込む

までに何を終わらせておくか、生徒にどのような働きかけをするのかなど、学年団や教師の活動を大枠として示す「教師用進路シラバス」をつくる。「実績を安定させるためには、教師が替わっても指導の骨格がぶれないようにすることが大切」と、西原先生は強調する。

自学自習を促すためのシラバスの活用に課題

着実に実績を伸ばす同校だが、課題もある。自学自習力の育成だ。毎日朝学習を実施し、夜は8時までセミナーハウスを開放して自学自習の場を設けているが、家庭学習時間は依然として横ばいで、自ら進んで学習する生徒は少ない。小誌03年6月号（注）で紹介した自学自習を促す目的で改善を重ねる同校のシラバスの活用状況はどうなのだろうか。

このシラバスは、予習の範囲があらかじめわかるように、授業1コマごとに授業内容や教材の使用範囲を示し、「生徒が使える」工夫も随所に盛り込む。例えば、国語や英語ではシラバスとワークブックを合体し、自学自習に活用しやすいようになっている。地歴・公民では「予習カード」を綴じ込み、予習をしたり、質問を書いて教師に提出したりできるようにしている。

教師の使い方や生徒の取り組み方によっては効果的だが、学校全体としては活用しきれていないのが現状だ。年度末に生徒に実施するアンケートでも、シラバスに対する評価は高くない。そのため、毎年、各教科のシラバス担当が中心となって改善点を洗い出し、変更を加えている。教務主任の上江洲（うえず）隆先生は次のように話す。

「教務部を中心とするシラバス委員会がありますが、改編は各教科に任されています。自学自習のために必要だという意識は全教師で共有されていますが、シラバスの形式が教科で異なることや、ワークブック化されていることを課題とする声もあります。本校のシラバスはどうあるべきかという点については、今後も研究していきたいと考えています」

今後の目標は、生徒の意識を難関大に向けることだ。07年度、2年生後期から難関大志望者を集めて補習の強化や意識付けを図ったところ、ほかの生徒も学習意欲を高めるといった波及効果が見られた。「コンスタントに実績を上げられるようになった今こそ、難関大志望者向けのプロジェクトの充実を図りたい」と、伊志嶺先生は意欲的に語る。

「これまでの指導では、地元の琉球大や地方国公立大に一定数を合格させることに主眼を置いてきました。今求められているのは、いかに難関大合格者の数を増やすか。そのためには、保護者や地域の方々に持ってもらうことが大切です。教師一丸となって、生徒一人ひとりの志望を実現させることに全力を注いでいきたいと思います」（伊志嶺先生）

バックナンバーはBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）

変革の明日を目指して

教師のベクトルを一つにすることが生徒の夢を実現させる

3学年主任 **辻上弘子**

◎2007年度、3学年主任となった年に過去最高の進学実績を上げることができました。

思えば、入学当初は、始業のチャイムが鳴っても席に着かず、廊下やベランダに出ている生徒も多い学年でした。「現役合格　夢実現」という目標を掲げて、「すぐやる、必ずやる、できるまでやる」と言い続け、『学年便り』では励ましの言葉を投げかけました。話せばわかる素直な生徒たちでした。

先生方が連携して、生徒を多面的に支援できたことも大きかったと思います。分掌と学年の連携を一層密にし、教務部や進路ガイダンス部のバックアップを得て、有意義な情報提供ができました。

各学年で担任団にも恵まれました。前期日程が終わったあとも、先生方に休日返上で小論文指導や面談指導にあたっていただけたのには、本当に頭の下がる思いでした。

今後の課題は、自学自習力の育成です。今の生徒は「やりなさい」と言った事には取り組みますが、自ら学習に向かう姿勢は弱い。シラバスの活用については、私の担当の英語では教師によって使う頻度がまちまちなのが現状です。教科内で意思統一を図り、効果的な活用法を詰めていきたいと思っています。

今年も3学年主任となりましたが、実績を残せるかどうかは、ひとえに教師の団結にかかっています。教師がベクトルを一つにして、生徒の「夢実現」に向けて邁（まい）進していきたいと思います。

茨城県立
古河第三高校

進学校への再起

危機感を背景に学年団で統一した指導が生徒の意識を変えた

◎「自立・敬愛・創造」を校訓として、豊かな人間性の育成と進路希望の実現を目指す。運動部では、野球部、サッカー部、ソフトテニス部、水泳部などが県大会や関東大会などに出場、文化部は写真部、美術部が県代表として全国高校総合文化祭に出展するなど、部活動でも実績を残す。

設立
1969（昭和44）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約240名

08年度進路実績
国公立大は、茨城大、宇都宮大、埼玉大、東京海洋大、高知大、茨城県立医療大、首都大学東京などに36名が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、中央大、東京女子大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ328名が合格。

住所
〒306-0054
茨城県古河市中田新田12-1

電話
0280-48-2755

Web Site
http://www.koga3-h.ed.jp/info-frame.html

実践のポイント

1. 服装指導や遅刻指導を徹底し、生活態度の改善を促す
2. 全学年で365日、毎日の学習時間の調査を実施
3. 中学校や塾を訪れ、出身者の今と卒業後の進路を伝える

地域からの批判をバネに定員割れから学校を再生

茨城県立古河第三高校の2007年度大学入試の合格実績は、同校の復活を学内外に印象付けた。前年度までの4年間、20人強で推移していた国公立大合格者が53人に。50人を超えたのは実に20年振りだった。当時の3学年担任・高橋良武先生は、「学年団の教師全員が危機感を持ち、改革を進めた結果」と振り返る。

同校は「古河に普通科の進学校を」という地域の要望を受けて39年前に開校した。以来、国公立大合格者数2桁を維持してきたが、90年代に入って減り始め、01年度には10人を切った。

同校への志願者数も減り続けた。学区内の中学校や塾を訪れても、評判はさんざんなものだった。ある塾関係者は「古河三高なら滑り止めでしょう」と言い、ある中学教師は「古河三高では生徒が伸びない」と話した。中でも、教師を愕然とさせたのは、「古河三高に入ったら、良い生徒もだめにされる」という指摘だった。

課題は進学実績だけではなかった。服装の乱れ、遅刻の常態化など、生活態度全般の評判も良くなかった。「あのような生活態度では、進学実績が低迷して当然」というのが、大半の中学教師や塾関係者の見方だった。進路指導部長の鴨志田恵司（さとし）先生は、次のように振り返る。

「『自由な校風』は本校創立以来の伝統。しか

茨城県立古河第三高校校長
杉田和幸 Sugita Kazuyuki
教職歴37年。同校に赴任して1年目。「生徒が生き生きと学校生活に取り組めるような学校づくりを目指している」

茨城県立古河第三高校
染谷英佐 Someya Hidesa
教職歴32年。同校に赴任して7年目。2学年副担任。「生徒に対しては常に誠実であるよう心がけていきたい」

茨城県立古河第三高校
田嶋一彦 Tajima Kazuhiko
教職歴28年。同校に赴任して13年目。生徒指導部長。「『凡事徹底』の大切さを生徒たちに伝えていきたい」

茨城県立古河第三高校
鴨志田恵司 Kamoshida Satoshi
教職歴29年。同校に赴任して4年目。進路指導部長。「モットーは『自分らしく』」

茨城県立古河第三高校
野村和男 Nomura Kazuo
教職歴25年。同校に赴任して8年目。進路指導部副部長。「我が子のような気持ちで生徒たちと接していきたい」

茨城県立古河第三高校
高橋良武 Takahashi Yoshitake
教職歴14年。同校に赴任して6年目。2学年担任。「当たり前のことを当たり前にできる生徒を育てたい」

茨城県立古河第三高校
藤田一輝 Fujita Kazuki
教職歴12年。同校に赴任して4年目。2学年担任。「生徒は、こちらが手をかけた分、情熱を持って接した分、成長してくれる」

し、自由を履き違えて規律を無視して行動する生徒が増えていました。自立した生徒なら問題ありませんが、そうでない生徒はまわりに流されてしまい、実力以下の結果しか得られないというのが、当時の本校の偽らざる姿でした」

自由の中にも自立した生徒が大半だった時代を見てきた教師にとって、生徒の変化への対応は難しかった。「自由な校風」を守りたい教師と、危機感を抱く教師が衝突することもあった。

生徒指導で生活態度を改善し内発的な意識改革を促す

同校がまず取り組んだのは、生徒指導の立て直しだ。登校時に教師が交代で校門に立ち、服装指導を徹底させ、週1回は「遅刻ゼロデー」を実施した。更に、何のために学校に来るのか、大学進学という目標に向けて何をすべきかを、あるときは集会や校内放送で、あるときはプリントにして配付し、繰り返し訴えた。

こうした指導により、「遅刻して何が悪いのか」と言う生徒がいた状況から、「遅刻は絶対にやめよう」という雰囲気に変わっていった。それでもたびたび遅刻する生徒には、掃除の機会などを利用して、家庭環境や生活習慣などについて聞き、生徒把握に努めた。

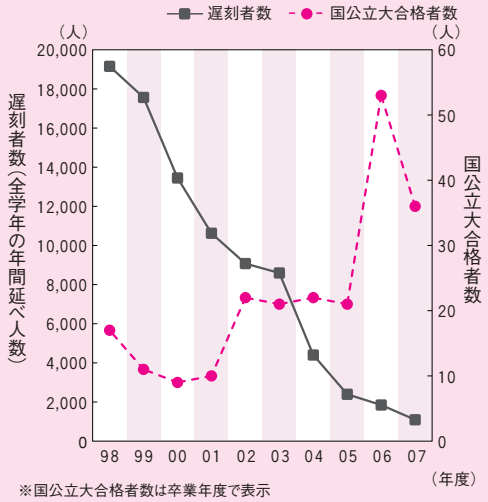
生徒指導部長の田嶋一彦先生は、「力で生徒を押さえ付けることは簡単です。しかし、高校生活で本当に大切なことは何かを、考えられる生徒になってほしかったのです」と話す。

こうした根気強い指導により、生活態度の乱れは次第に落ち着き、1日平均50人だった遅刻者は、今では3人にまで減った（図1）。こうした生活態度の改善は、生徒自身の意識に負うところが大きかったと、田嶋先生は話す。

「当時は、まわりの生徒が遊ぶ中で、1人で勉強する、制服をきちんと着るのは格好悪いと思う生徒が多かったようです。内心ではきちんと生活を送りたいと思っていたからこそ、目標のためには生活態度を改めよう、遅刻する生徒や服装の乱れた生徒の方が特異だ、という教師の言葉がすっと浸透したのだと思います」

最終的には、志望を達成したいという生徒の思いが、生活態度の改善につながったのだ。

図1 遅刻者数と国公立大合格者数



※国公立大合格者数は卒業年度で表示

教師の意思統一を図り課外補習と部活動を両立させる

生徒指導の徹底により落ち着きを取り戻した同校は、05年度に本格的な改革に乗り出した。他生徒をリードするような存在をつくるべく、特進クラスを設置。授業時間を55分に変更、週3日（月・木・土）の課外補習の導入など、今も受け継がれる指導の基盤は、この年に入学した生徒への指導で形づくられた。

05年度の1学年は、例年に比べて成績や意欲が特に高い生徒が集まったわけではない。それまでと違っていたのは、「学校を変えるのは今しかない」という教師の決意だった。

「本校には、中学時代にトップになれなかった生徒が多く入学してきます。そうした生徒が、悔しさをバネにもっと勉強ができるようになりたいと思っていることに、生徒との会話で気づかされました」（高橋先生）

どのような生徒でも自分の志望を実現したいと思っているという事実が、教師同士での切磋琢磨を生み出した。この学年の特進クラス担任・藤田一輝先生は、「ほかのクラスには負けたくない、絶対に結果を出したいという思いで、教師同士が互いに刺激し合いました」と話す。

生徒の意識の高さ、教師の団結の表れの一つが、課外補習と部活動の両立だろう。課外補習の時間にはすべての部が練習を控えるように徹底をした。すると、1、2年生100%、3年生70%と出席率が高まった。

「中途半端な気持ちで部活動に参加してほしくありません。逆に部活動にばかり力を入れさせても、受験準備のために早期に退部してしまう生徒が増えてしまいます。めりはりのある生活が勉強も部活動も充実させると、顧問も考えるようになりました」と、田嶋先生は話す。

年間1000時間を目標に学習時間調査を毎日実施

06年度には、家庭学習時間の調査を土日や年末年始の休みに関係なく毎日行った。特徴は、担任の方針によって書式を変更できる点だ。藤田先生のクラスでは、3教科それぞれの学習時間を記入させ、教科のバランスや学習時間総数をチェックする。ねらいは学習時間の増加にあり、年間1000時間が目標だ。一方、高橋先生のクラスでは、学習内容には触れず、起床・食事・就寝などの時間を記入させ、規則正しい生活習慣の定着を促す（**図2**）。いずれも生徒の負担を抑えながら、情報を得るための工夫だ。

クラス全体・学年全体の学習時間は、毎週、生徒に学習記録を基にマークシートに転記させ、進路指導部が集計。一覧を教師全員に配付する。生徒個々の学習状況も把握でき、1日の学習時間が60分未満の生徒は自動的に赤字で表示され

図2　「学習記録」の例

学習記録の書式は基本のものがあるが、クラスの状況によって担任独自のものを用いる場合もある。2学年の場合、基本的には、藤田先生の書式（左）を使用。3教科の学習時間を記録させ、教科バランスを見る。高橋先生の書式（右）では、起床・就寝時間も書かせ、生活習慣の把握を重視している

る。調査の目的は、学習時間を定期的に把握し、家庭学習時間を増やすことだったが、進路指導部副部長の野村和男先生は、生徒の精神面の把握にも役立っていると話す。

「毎日120分学習していた生徒が、急に60、50分と減ることがあります。悩みがあるのではないかと、担任はすぐに面談をしたり、声かけをしたりして対処できます。生徒の変化は、特定時期の調査だけではわかりません。学習時間だけでも継続して調査すれば、生徒の内面的な変化を把握できることは新たな発見でした」

中学校への広報活動で卒業生の姿を伝える

変わりつつある学校を知ってもらうため、広報活動にも力を入れた。前教務部長の染谷英佐先生は、「03年度から塾訪問を始めました。当時、国公立大合格者は20人強いましたが、塾の先生と話してそれが知られていないのだと初めてわかりました。学校案内やホームページで情報を公開するだけでは不十分だと痛感しました」

鴨志田先生は、同校の立地条件から広報活動の重要性を強調する。

「本校は東京まで電車で1時間圏内。交通の便がよいため、他県の学校に進学する可能性も高い。志願者数の安定には広報活動が重要です」

入学者の多い中学校10校には、校長、教頭ら管理職、1学年の担任も含めた2、3人を1チームとして年2回訪問する。自校のPRや中学校の情報収集も行うが、話の中心はその中学校の卒業生の現状を伝えることだ。4月は当該中学校出身者の高校卒業後の進路を報告し、6月はその年の入学者の高校生活での姿を伝える。

「中学時代は成績が良くなかった生徒が難関大に合格した、目立たなかった生徒が、本校に入学後、積極的に学習や部活動に取り組んでいる。卒業生の今を伝えることで、中学校の先生は喜んでくれます。高校側が足を運んで情報を伝えることで、中学校との信頼関係が深まっていると強く感じます」と、染谷先生は話す。

一連の改革により、学校の雰囲気は大きく変わった。進路指導部実施の生徒へのアンケートでは、7割が「学校生活に満足している」と答えた。何より大きく変わったのは、教師の意識だ。杉田和幸校長は「手をかければかけた分だけ生徒は伸びると、教師が実感できたことが大きいのではないでしょうか。進路指導と生徒指導、学習指導がうまく嚙み合って、学校に活力を与えていることを感じます。進路指導と生徒指導は学校を支える重要な柱です。両指導に力を注ぎ、日本一面倒見のよい学校を目指したいと思います」と話す。

校舎の入り口には「めざせ！　第一志望・現役合格」という横断幕が掲げられ、生徒と教師を鼓舞している。生徒のやる気と期待に応えようとする教師。嚙み合い始めた歯車が同校を前進させる。

変革の明日を目指して

躍進の決め手は学年団の団結力と生徒の頑張り

2学年担任 **高橋良武、藤田一輝**

高橋先生◎05年度は久々に定員が充足し、私を含めて学年全体が「改革元年」の心意気に溢れていました。結果は3年後、前年度比2倍以上の国公立大合格者数として表れました。躍進の秘訣は学年団の風通しの良さにあったと思います。教師同士が日常的に職員室で情報を交換し、気になる生徒の相談を持ちかける雰囲気がありました。また、学年主任や進路指導部長には私たちの意見をどんどん吸い上げていただきました。「何かあったら私が責任を取るから頑張れ」という言葉は心強く、生徒に「最後まで諦めるな」と自信を持って励まし続けることができました。大切なのは、生徒の志望実現に向けて、いかに学年団が一つになれるか。そうした教師の意気込みが生徒の気持ちも引き出していくのです。

藤田先生◎私の校務分掌は進路指導部で、バレーボール部の顧問もしています。課外補習時に部活を休みにすることには、ジレンマを感じることがありました。しかし、部活動に熱心な生徒でも、根底には自分の進路を実現したいという思いがあり、教師はそれに応えねばならないと思います。本校は進学校ですが、勉強一辺倒という生徒は少なく、部活の加入率は7割、理系の特進クラスでも部活をしながら上位の成績を収めている生徒がいます。時間が少なくても、生徒自身が考えて効率的に勉強しようと頑張っています。教師である私自身にとっても、そのバランス感覚が今後の課題だと感じています。

三重県立
朝明（あさけ）高校

接続を重視したキャリア教育

入学時と就職内定後の指導を徹底し退学・早期離職を着実に減らす

◎2007年に創立30周年を迎える。学力の充実、個性の伸長、品性の陶冶、体力の向上を図り豊かな調和の取れた人間の育成を目指す。普通科の中に福祉コースを設置。2年生からの類型には、進学・ビジネス・アスリート・自然環境の4コースがある。自転車競技部は全国大会団体入賞、レスリング部、ラグビー部は全国大会出場。

設立
1978（昭和53）年

形態
全日制／普通科（進学・ビジネス・アスリート・自然環境・福祉の各コース）／共学

生徒数
1学年約200名

08年度進路実績
4年制大は四日市大、皇學館大などに20名、短大は鈴鹿短大、名古屋文理短大などに10名、そのほか専門学校、就職など140名。

住所
〒512-1304
三重県四日市市中野町2216

電話
059-339-0212

Web Site
http://www.mie-c.ed.jp/hasake/

実践のポイント

1. 入学時の構成的グループエンカウンターと「目標設定シート」の活用で良好な人間関係を構築
2. 教育コーチングの技法を導入し、教師の面談に対する意識を改革
3. 「近況報告ワークシート」で内定企業と連携し生徒の意識を高める

カウンセリングの手法で支え合う集団づくりを促す

三重県立朝明高校の進路指導室、放課後に進路指導部の教師が女子生徒と向き合っている。

「進路を決められないのは、何か引っかかっているから？」

「……」

「何か気になることがあるの？」

「……」

沈黙が続いたあと、女子生徒がポツリポツリと語り始める。「うまく言えないんだけど……」

教師は生徒が話すまで辛抱強く待ち、生徒の言葉にあいづちを打ち、ときにおうむ返しをしながら、共感をさりげなく伝える。なかなか本心を見せなかった生徒が次第に心を開いていく。

2006年度、同校は面談に「教育コーチング」の技法を取り入れた。これは、傾聴・承認を基本に本人自身の気づきを促すことで内発的な動機付けを喚起するコミュニケーションスキルだ。同校にコーチングを取り入れた意義を、進路指導部長の鈴木建生先生は次のように話す。

「教師は、ともすると生徒の話を受け流し、無意識に自分の理想を押し付けがちな面があります。指示や命令だけでは、生徒は自発的に将来を考えるようになりません。生徒自ら考え、歩む道を選択させることが、『生きる力』を育てるのではないでしょうか」

教育コーチングを導入したのは、教師のコミュニケーション能力の向上が生徒との信頼関係を築く上で重要と考えたからだ。数年前まで、同校では、学業不振などを理由に、卒業までに1学年の約3割が中退していた。

「本校には、家庭環境などの問題から十分な学力を身に付けられないまま入学してくる生徒が少なからずいます。自己肯定感が低いために、教師のアドバイスに対して『無理』『無駄』と言って試そうともしない。そうした生徒は対人関係能力も弱く、クラスでも孤立しがちで、ちょっとした人間関係のつまずきから学校を去る場合もあります。自分で人生を切り開く力を身に付けさせるために、生徒の自己肯定感を高める必要があると考えました」（鈴木先生）

同校が重視したのは、生徒と教師の信頼関係と、生徒同士が支え合う仲間づくりだ。まず着手したのは入学時の人間関係づくりだった。

「中学校まではグループ活動など、ほかの生徒と共同で取り組む機会が数多くあります。しかし、高校に入った途端に生徒自身の責任の範囲が大きくなるため、疎外感を抱く生徒もいます。中高の接続部分で良好な人間関係を構築する必要があると考えました」（鈴木先生）

04年度には、「総合的な学習の時間」に構成的グループエンカウンター（SGE 注）を行った。03年度にSGEの専門家を招き、教師全員が2回の研修・講演を受けてスキルを習得。08年度4月には、規律ある生活を通して仲間づくりを促すため、新入生の宿泊研修を導入した。

目標を明確にすることで肯定的な自己イメージを築く

教師と生徒の信頼関係づくりの一助として活用するのが、「進路目標達成シート」だ。目標を明確にして肯定的な自己イメージを築かせ、進路に対する前向きな気持ちを引き出すのがねらいだ。入学前にシートを渡し、あらかじめ学校生活の目標、卒業後の進路目標、具体的な行動目標などを記入させ、入学式の日に回収する。

4月の最初の面談ではこのシートを見ながら生徒と話し、信頼関係づくりに努める。1学年担任の宇佐美尚先生は、次のように話す。

「面談では、将来の夢に目を向けて、高校生活の大切さに気付かせるように話しています。導入期では、学校に居場所をつくり、教師に相談すれば何とかなるという安心感を生徒に持たせることが重要だと思っています」

これらの取り組みの成果を土台に06年度に導入したのが、冒頭紹介した教育コーチングによる面談だ。06年度の5～8月、および12月にコーチングの専門家を招き、教師全員が研修を受けた。一部の教師は、同じ悩みを持つ他校の教師や中学校教師と合同で定期的に研修会を行う。

「教師一人ひとりが自分を高めようとする意識を共有しているのが本校の強み。現状を打開したいという意欲が、新しい手法を取り入れる土台となっています」と川瀬正次教頭は話す。

教育コーチングによって、教師は生徒の声にじっくり耳を傾ける姿勢になった。進路指導部の郡正樹先生は、「沈黙が続くと口を挟みたくなりますが、無理にドアをこじ開けようとする

三重県立朝明高校校長
川畑幸永 Kawahata Yukihisa
教職歴34年。同校に赴任して1年目。「生徒の心の裏側にある思いを大切にしたい」

三重県立朝明高校教頭
川瀬正次 Kawase Masatsugi
教職歴33年。同校に赴任して4年目。「才能とは『努力を継続する力』ということを生徒に伝えていきたい」

三重県立朝明高校
鈴木建生 Suzuki Takeo
教職歴30年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「教師自身の成長しようとするエネルギーが生徒を育てる」

三重県立朝明高校
宇佐美尚 Usami Hisashi
教職歴13年。同校に赴任して11年目。1学年担任。「生徒には、その時々でできることに最善を尽くしてほしい」

三重県立朝明高校
郡 正樹 Koori Masaki
教職歴9年。同校に赴任して5年目。進路指導部。「自分が今、力を入れていることに自信を持てる生徒を育てたい」

注　Structured Group Encounter。生徒同士が自己を開示し合う活動を通して、互いを認め合う意識を育むカウンセリング手法

と逆に生徒は心を閉ざしてしまうものです。沈黙を大切にするようになったことで、生徒の心の奥深くまで入れるようになりました」と話す。

導入期指導の充実、集団づくり等の諸施策により、08年度の1年生は2学期の時点で、退学者はゼロだ。

企業との連携で早期離職の減少を目指す

同校は次に卒業後の早期離職の対策に乗り出した。ある年、食品会社に入社した卒業生が、わずか数日で会社を辞めた。鈴木先生が理由を聞くと、「わさびが目に染みるから」と答えた。その会社では新入社員は目に染みないようにゴーグルをかけることもできるが、卒業生は上司や同僚に相談できず、「自分には合わない」と辞めたのだ。04年度の卒業生は就職希望者84人全員が内定を得たが、半年間で26人が、1年間で合計30人が離職した。

「友だちや先生と話す勇気もなく、意欲の低い生徒のやる気や力強さを引き出していく必要性を感じました」と鈴木先生は話す。

早期離職を減らすため、05年度に就職内定後の支援プログラムを導入した。就職内定後から就職までの半年間を社会人としての土台を築く時期と位置付け、生徒の意欲を維持しようとした。06年度からは、社会人としての自覚を引き出すために、日々の目標や達成度を記録する冊子『オーパ！』を活用する。目標設定シートに半年間で達成すべき三つの目標と行動計画を記入。それを基に週単位・日単位の目標を設定し、今日の気づき・感謝などを記入させる（**図1**）。

宇佐美先生は、「感想はなるべく肯定的で元気が出る言葉を書かせるようにしています。生徒には目標よりも感想の方が書きづらいかと考えていましたが、実際は逆でした。前向きなコメントを寄せる生徒も多く、教師自身が励まされることがよくあります」と話す。

07年度には、内定企業と連携し「近況報告ワークシート」（**図2**）も取り入れた。「若者の早期離職の改善には、学校と企業が共に生徒を育てる視点が重要」と、鈴木先生は強調する。シートに「行動目標」「就職に際しての不安」などを書き、内定企業に送る。企業には入社までの半年間に、内定者が取り組むべき課題を提出してもらう。内定企業に自分を理解してもらい、生活を振り返って改善点に気づかせることがね

図1　「オーパ!」の記入例

オーパ（OOPA）は、Optimism（明るく楽しく）、Outcome（結果をイメージする）、Purpose（目的をはっきりさせる）、Action（実行あるのみ）の略。セルフコーチングの技法を取り入れ、目標と成果を明確にし、夢に対する思いを強くさせるのがねらいだ

図2　近況報告ワークシート

シートに近況を書き込み、内定企業に報告する。社会人としての意識を高めさせることがねらい。同様に、推薦・AO入試で合格した大学へも送る。返答率が、大学は7割弱、企業は5割強だ。今後は離職率と返答率の相関を分析し、企業に対応を促していきたいと考えている

らいだ。

企業からの課題は、社会人研修用の通信教育や表計算ソフトの習得などさまざま。人事担当者にはシートに対する感想を寄せてもらう。企業から手書きのメッセージをもらうことで、生徒は自分への期待を感じ、やる気を高めていく。

同校は卒業生への支援にも力を入れる。「就職者激励訪問」として、4月から就職者全員を訪れ、近況を把握する。何か悩みや問題を抱えていそうな卒業生に対しては、学校に来校させるか、または電話でカウンセリングを行う。

「卒業生の中には仕事を辞めても相談先がわからず、再就職できずにいる者もいます。生徒と信頼関係を培ってきた学校が支援できることは、もっとあると思うのです」と郡先生は話す。

改革の成果は徐々に現れており、早期離職は05年度の36%から06年度は26%、07年度は20%と着実に減っている。

ファイナンシャル教育で健全な金銭感覚を養う

同校はキャリア教育の一環として金銭教育にも力を入れる。「就職後は、お小遣いとは桁違いのお金を手にします。生徒の中には経済的に苦労している家庭もあり、金銭感覚が身に付いていないこともあるからです」と郡先生は話す。

同校の金銭教育は、5年後、10年後の生活を考えさせることから始まる。家や車を購入するのか、食費や衣料にお金をどの程度かけるのか、理想の生活を考えながら、それぞれにかかる費用を記入させる。その金額を実際の初任給と比較させるが、多くの場合、理想には届かない。「現実の厳しさを知ると同時に、育ててくれた両親に感謝してほしい」と郡先生は話す。

この結果を踏まえ、理想に近づくために、何を削るべきか、どのようにお金を増やすのかをグループで考えていく。「宝くじを買い続ける」「パチンコで稼ぐ」といった非現実的な意見が飛び交う中、「資格を取る」「役職を上げる」など堅実な答えが出てくるまで教師はじっと待つ。「保護者がお金に無頓着であれば、子どももその影響を大きく受けます。その連鎖を断ち切るのは教育です。お金の問題から目をそらさずに向き合うことが、これからの学校教育には欠かせません」と、鈴木先生は強調する。

人間関係の構築、キャリア教育の充実により「生きる力」の育成に取り組む朝明高校。今後の課題は授業の充実だ。現在、同校ではグループ学習を取り入れた授業改革を進めている。学び合う集団をつくることで、学習意欲を高めていく。川畑幸永校長は次のように抱負を語る。

「6年間、改革を意欲的に進めてきましたが、その精神と手法はすべての教師に浸透しつつあります。今後は、それを具体的な成果に結び付けていくとき。生徒が自らの成長を実感できる学校を目指し、常に生徒の視点に立った改革を続けていきたいと思っています」

変革の明日を目指して

チャレンジするすばらしさを伝えていきたい

進路指導部 **郡 正樹**

◎本校に赴任したとき、最初に感じたのは生徒の自己肯定感の低さです。生徒を指導すると、すぐに「無理です」という返事が返ってくる。重ねてアドバイスをすると、今度は「でも……」となる。自分に自信が持てずに、安全な方向に流れたがる。自分自身を高めようとする意欲を育てる必要性を痛感しました。

本校に赴任する前、教育相談について一通り学んでいたこともあり、初めてＳＧＥやコーチングに接したときも、違和感なく受け止めることができました。ＳＧＥでは最初、うまくグループをサポートすることができず、生徒が泣き出してしまうこともありました。何度か続けていくうちに、そうした「事故」を事前に回避することができるようになりました。

また、これまでは自分の面談について、あまり省みることはありませんでした。コーチングスキルを身に付けたことによって、自分の面談を客観的に振り返られるようになりました。改革を通して、自分自身が成長していることを実感しています。

本校の改革は、形になりつつあるという手応えを感じています。夏休みに登校して自習する生徒の姿も見られるようになりました。私が赴任したころにはなかった光景です。そうした生徒が１人でも増えるよう、これからも挑戦することの大切さを伝えていくつもりです。

新たな理論の創造に大切なのは じっくり研究対象に取り組むこと

O KOYA
東京大名誉教授　日本学士院会員
松尾浩也

2009年5月からいよいよ実施される「裁判員制度」の名付け親であり、東京大法学部部長や法務省の法制審議会会長を歴任し、刑事訴訟法の権威として知られる松尾浩也東京大名誉教授。現在も法務省の特別顧問として立法活動に尽力している松尾教授に、研究の原点と学問の魅力をうかがった。

読書で知った、新しい世界に触れる喜び

小学校時代の私の最大の楽しみは、本を読むことでした。学校から帰ると毎日父の書斎にもぐり込み、吉川英治、佐々木邦、江戸川乱歩などを片っ端から読みました。読書によって自分の知らない世界が見えてくることに、大きな喜びを感じたのです。「刑事訴訟」に最初に触れたのも本の中でした。実在の殺人事件をモデルにして調書や裁判の様子を盛り込んだ『支倉事件』（甲賀三郎著）や海の上で酷使される労働者の姿を描いた『蟹工船』（小林多喜二著）で、被告人を追及する過酷な様子などに触れ、子ども心にも刑事手続の厳しさ、切なさを感じたことを覚えています。

現行法制定の過程を解き明かす

大学では、父の勧めもあり法学部に入学しました。「六法ぐらいは早く読んでおこう」と、入学手続きをした日に東京大正門前の書店で『小六法』を購入しました。戦後、日本の法律はいくつも改正され、戦前につくられた文語体の法律と、憲法のように戦後につくられた法律が六法に混在していました。刑事訴訟法は口語体で書かれた新しい法律の一つで、私が大学に入学した1949年1月に施行されたばかりでした。

刑事訴訟法とは、刑法が定めた刑罰を実行するために、捜査・起訴・公判の手続きを定めた法律です。旧刑事訴訟法は、捜査側に有利につくられており、自白を強要するなど人権保護の視点が欠けていました。しかし戦後、日本国憲法が公布され、刑事訴訟法も人権を尊重しながら真実を追求するという観点の下に改正されたのです。「戦前の暗い部分を一掃しようとする新しい時代の法律だ」と思いました。わかりやすい口語体で書かれた革新的な内容に感動し、興味を持ったのです。

当時は刑事訴訟法を専門に研究する研究者がまだ少なく、改正されたばかりの刑事訴訟法には研究すべきことが数多くありました。その一つが、制定過程の解明です。刑事訴訟法は、短期間で仕上げられた日本国憲法と異なり、3年以上に渡りGHQ（連合国軍最高指令官総司令部）と日本側の法律家の協議によって形づくられていきました。しかし、その過程は知られていなかったのです。私は、現行法の立法に携わった東京大法学部の團藤重光先生から指示を受け、制定過程を研究しました。協議会でのやりとりが記録されたノートや資料を整理し、条文の一文一文がどのように制定されたかを解明していきました。すると、アメリカ法の理論を取り入れた部分とそうでない部分が浮かび上がってきたのです。じりじりと研究対象を追い詰め、丹念に文献や資料を調べると見えてくるものがある。私はこの研究で大きな手応えを感じました。

MATSU

その後、日本の刑事手続の独自性を明らかにすることは、私の研究人生で大きなテーマになりました。例えば、日本の刑事事件では捜査を徹底的に行い証拠を集め、有罪だと確信が持てないと起訴しません。しかし、アメリカではある程度の証拠があれば起訴します。戦前にはドイツ法、戦後はアメリカ法の影響を強く受けたにもかかわらず、独自の運用をされた日本の刑事手続の特色を私は「精密司法」と表現し、比較法、歴史、司法統計の分析資料などを踏まえて説明しました。

ただ近年、膨大な証拠書類を集めて、裁判官が時間をかけて検討する「精密司法」には行きすぎた部分があるのではないかと言われています。そこで導入されるのが、国民に裁判員として刑事裁判に参加してもらう裁判員制度です。私が「裁判員」と名付けたのは、欧米に存在する陪審制や参審制のいずれにも偏ることなく、日本にふさわしい制度になれば、と思ったからです。裁判員制度導入により、刑事裁判がより健全な方向へ進むよう期待しています。

自分なりの考えを持つことが重要

子どものころには、将来、自分が法律学者となり、裁判員制度などの司法改革にかかわるとは夢にも思いませんでした。10代といえばその未来は、真っ白な状態で、可能性に満ちています。その可能性を更に広げるために、是非取り組んでほしいのが読書です。

ただ、本に書いてあることがすべてだと受け止めてはいけません。孟子の言葉に「尽く書を信ずれば即ち書無きに如かず」という一文があります。私の恩師である東京大法学部の平野龍一先生はこの言葉になぞらえて「尽く師を信ずれば師無きに如かず」と私たちによく言われました。「本に書いてあることや先生の言うことだけを信じるくらいなら、本を読んだり、先生に教わったりしないほうがいい」という意味です。平野先生は、師の説から離れることに寛容であり、自分の考えを持つことの大切さを説いてくれました。私が発表した「精密司法」という考えは、先生のお考えとは異なるものでしたが、先生は私の主張を一度も否定しませんでした。もちろん、学問において新しい発見や新しい理論を創造することは、容易なことではありません。20年、30年かかるかもしれません。しかし、じっくりと対象を見つめるからこそ、明らかになることがあるのです。80歳を過ぎてもなお、私が研究者でいるのは、まだまだ見えてくるものがあるからです。だからこそ、学問は面白いのだと思います。

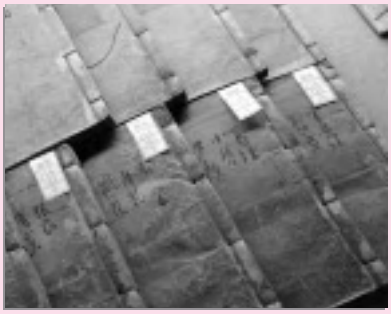
まつお・こうや　1928年熊本県生まれ。東京大法学部法律学科卒業。東京大法学部教授、千葉大法経学部教授、上智大法学部教授等を歴任。94年紫綬褒章、00年勲二等旭日重光章受章。現在、東京大名誉教授、日本学士員会員、検察官適格審査会会長。法務省特別顧問として、法制審議会の刑事立法活動に参画。主な著書に『刑事訴訟法〔上〕・〔下〕』（弘文堂）、など多数。

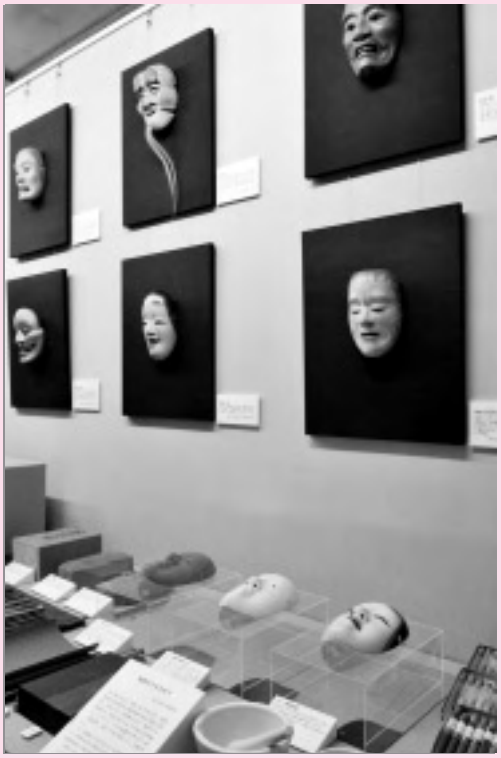
◎本コーナーに登場する研究者は日本学士院の会員の方々です。日本学士院は、学術上功績のあった科学者を優遇するための機関で、人文科学70名、自然科学80名が在籍し、新会員の選定、公開講演会などの活動を行っています。会員に選定されることは研究者として名誉なこととされ、また日本学士院賞は我が国の学界では最も権威ある賞として、毎年初夏に行われる授賞式には天皇皇后両陛下がご臨席されます。http://www.japan-acad.go.jp/

早稲田大大学院 文学研究科 演劇映像学コース・日本語日本文学コース

演劇学

演劇は、人間の内面や人間と社会現象の関係を表す重要な表現方法だ。日本古来の演劇の一つである能を、学問の対象として捉えることの意味は何か。能の歴史的変遷を研究し、昔の能の再現を試みている早稲田大の竹本幹夫教授に話をうかがった。





演劇学って？

演劇を入口に、社会や人間の表現行為を探究

日本演劇（能、狂言、文楽、歌舞伎、近現代演劇）、東洋演劇、西洋演劇、舞踏、映画などを対象としており、それぞれのジャンルの成り立ちや特性、理論を研究する。東洋演劇と西洋演劇との比較や、演劇が映画に及ぼした影響など、分野横断的な研究も重要となる。戯曲研究については文学、演劇の歴史については歴史学、社会の中で演劇がどのように発展してきたかについては社会学というように、他学問との関連も深い。演劇を入口にして、「社会とは何か」「人間の表現行為とは何か」を探究するのが演劇学だ。

教授が語る

秀吉時代の能を復元 当時の能の美や感動を 時代を超えて蘇らせる

竹本幹夫 教授

たけもと・みきお　早稲田大大学院文学研究科単位取得満期退学。文学博士。実践女子大文学部助教授、早稲田大文学部教授等を経て、現在、早稲田大文学学術院教授、早稲田大坪内博士記念演劇博物館館長。グローバルCOEプログラム拠点リーダー。1999年に観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。著書に『対訳で楽しむ鞍馬天狗』（檜書店）等の対訳シリーズ等がある。

学問との出合い

能の美しさに感動し能楽研究の道に

私は演劇学の中でも、日本の古典芸能の一つである能を専門に研究しています。

私が初めて能と出合ったのは高校2年生、古典芸能好きの伯父に誘われて観劇したときでした。「結構面白いものだなあ」と感じた私は、それから能楽堂通いをするようになりました。ただ当時は、のめり込むというほどではありませんでした。

能とのかかわりを決定的なものにしたのは、大学1年生のときに見た観世寿夫[1]（かんぜひさお）の舞台です。彫刻のような美しい姿勢を保ちながら舞う姿に、私はすっかり魅了されました。しかもその美しさは、1曲を終える瞬間までずっと保たれていたのです。「芸術とはこういうものか」と、心の底から感動したことを今でもよく覚えています。

能は、テンポは緩やかですが、演技に無駄は全くありません。ワキ[2]が演技を終えると、すぐにシテ[2]が動き始めるというように、つなぎの部分が洗練されています。また、上達した能役者であればあるほど、身体と表現が一体化しています。子どもを失った母が悲しみにくれている場面であれば、嘆いている雰囲気が体全体から醸し出される。だから、観客も強い緊張感を持って意識を舞台に集中できるのです。

私は演劇や舞踏には二つのタイプがあると考えています。一つはミュージカルのように人の心を解放させる作用があるもの。ミュージカルは見終わったあとに、感情が外へと解放されますよね。日本の古典芸能でいえば、歌舞伎も「解放の演劇」だと思います。

もう一つは、人の心をぐっと内面へと集中させる作用があるもの。まさに能がこれにあたります。観客はピンと張りつめた緊張感を持って舞台を見つめます。クラシックバレエなども、集中させる作用を持った表現といえるでしょう。

心を解放させる表現と、集中させる表現のどちらを好むかは、人それぞれです。私の場合は後者に強く惹かれ、能楽研究を志すことになったのです。

研究テーマ

能や演劇を切り口に人間と社会の本質に迫る

能楽研究の中心は、文学研究です。国文学の研究者が『源氏物語』などを読んで作品を研究するのと同じように、能楽研究の研究者も能楽論やさまざまな能の曲目をテキストとして分析します。

歴史も主要な研究テーマです。例えば、江戸時代には、能は大半の大名家で上演されたほど盛んでした。そのため、全国の図書館や郷土資料館には、江戸時代の史料が今も保存されています。歴史研究では、そうした史料をひもとき、当時どんな曲目が演じられていたかなどを研究します。

しかし、能は文献だけを調べればすべてがわかるわけではありません。現実に舞台で演じられてきたものだからです。長い歴史の中で、実際の舞台ではどのように上演されてきたかを、より具体的に明らかにしていく研究も重要です。

私は2000年から02年にかけて、豊臣秀吉の時代に上演されていた能

の演出の復元に取り組みました。古い史料には、当時の舞台の演出について書かれた記録も数多くあります。全国に残るそうした史料を突き合わせながら、能の発展の歴史を系統立てて整理し、秀吉の時代には能がどのように演出されていたのかをたどっていったのです。そして、能役者の皆さんの多大な協力を得て、秀吉が見た[3]『卒都婆小町（そとばこまち）』を復元しました。

現在の『卒都婆小町』の上演時間は約90分です。ところが、秀吉時代の版で演出してみると、約50分で終わることがわかりました。当時の拍律で謡うと、自然とテンポが速くなるのです。世阿弥時代（室町時代）の謡は、笛の演奏に合わせて謡っていたという記録が残っています。今は、笛と謡が音を合わせたりすることはありません。今回はその中間をねらいました。

そうして復元してみると、秀吉時代と現代の能とでは、受ける印象が随分違いました。秀吉時代の能は軽くてスピード感があり、謡はメロディックです。観賞後の客の中には節回しを覚えて鼻歌交じりに帰る人もいました。こうしたことは、現代の能鑑賞ではまずあり得ないことです。

写真　江戸時代に市販されていた狂言の台本。早稲田大には演劇博物館があり、このような国内外の貴重な資料が展示されている。入館は無料

私は先ほど、「能は集中の芸能である」という話をしましたが、能のルーツをたどっていくと、むしろ当初は「解放の芸能」だったことがわかったのです。能が庶民から支持を得られたのも、観客がわっと沸いて心を解放できる娯楽性の高いものだったからなのでしょう。

では、能はいつから「解放の芸能」から「集中の芸能」へと転換したのでしょうか。おそらく江戸時代に入り、能が武家社会で[4]「式楽（しきがく）」として取り入れられてからだと考えられます。当時の史料には、幕府が能役者に対して「おまえの芸はなっていない」といった通達を頻繁に出していたという記録が残っています。こうして娯楽性が徐々に削ぎ落とされ、より緊張感の高い芸へと変わっていったのでしょう。

能の演出や上演形態の変遷をたどっていくと、時代ごとに、どのような性質の芸能が、どのような層の人によって評価され、求められてきたかといった[5]精神史や文化史が見えてきます。歴史というと政治的な事柄ばかりに目が向きがちですが、文化の歴史を探ることも、私たちがこれまで歩んできた道のりを知り、社会とは何かを追究していく上でとても意味があります。

今、私が最も関心があるのは、「能のような演劇が成り立つ歴史的条件」についてです。能が大成されたのは14世紀ですが、中国で演劇上演が盛んになったのは13世紀、ヨーロッパで今につながる古典劇が成立したのは16世紀と、ほぼ連続するのです。世界で立て続けに演劇が花開いた理由は何か。このテーマに取り組むには、西洋演劇や東洋演劇の研究者との共同研究が不可欠となります。

私は最初、観世寿夫の芸に感動して能の世界に入りました。学問の出発点は「好き」でよい。入口は能や演劇ではなく、ほかの分野でも構いません。「好き」から始まって、「人間の歩み」や「社会とは何か」といった深い問いにまで下りていけるのが、学問の面白いところです。

高校生へのメッセージ

難しいことでも取り組めば やがて面白さが見えてくる

私が観世寿夫の能を初めて観たときに心の底から感動できたのは、それまでにたくさんの能や狂言を舞台で観ていたからだと思います。能楽鑑賞の下地ができていたから、本当にすばらしいものに出合ったときに感動できたのです。下地がないときに観世寿夫の芸を観ても、「きれいな舞だったなあ」で終わっていたかもしれません。

高校時代はこの下地をつくる時期だと思います。ちょっと難しそうなことにも、頑張って取り組んでみてください。すると、下地ができて、難しいけれど深いもの、面白いものと出合うことができます。実は難しいものほど、奥が深くてやりがいがあるものなのですよ。

高校生にお薦め入門書

『風姿花伝』
（世阿弥著／岩波書店）
◎能の確立者である世阿弥が記したもっとも有名な伝書が『風姿花伝』です。能の演技や演出、修行の在り方などについて述べられており、現代にも通用する一級の能楽論であり演劇論です。

「対訳でたのしむ能」シリーズ
（竹本幹夫ほか著／檜書店）
◎「安宅」や「俊寛」、「高砂」など、主だった能の曲目に、現代語訳をつけたシリーズ本です。能の作品に実際に触れてみたい人は、是非読んでみてください。

大学院生が語る

古い史料から新しい発見がある喜び

青柳有利子さん
あおやぎ・ゆりこ
早稲田大大学院文学研究科
日本語日本文学コース
博士課程1年
（埼玉県立所沢高校出身）

研究のテーマ

江戸時代の能の上演記録を調べる

私の研究テーマは「江戸時代の能」についてです。能が確立されたのは室町時代ですが、そこから現代まで一足飛びに来たわけではなく、歴史の流れの中でさまざまな変化がありました。ところが、能の歴史研究では、室町時代の研究は充実しているのに、江戸時代については手薄なのです。まだわかっていない事柄も多く、やりがいがあると感じました。

今年の春に提出した修士論文は、江戸時代の中でも、盛岡藩（今の岩手県と青森県東部）の江戸藩邸で上演された能にテーマを絞って書きました。盛岡市の中央公民館に、盛岡藩の藩主であった南部家に関する史料が一括して保存されています。私は中央公民館を訪ね、能関連の史料を探し出し、江戸時代前期から幕末までの上演の記録を研究したのです。

盛岡藩の能の歴史について調べたことがある人は、50年前に1人いただけですから、私が2人目です。しかもその方は「盛岡城で上演された能」が研究の中心でしたから、「盛岡藩の江戸藩邸で上演された能」を研究したのは、私が初めてということになります。

私は盛岡藩の能を研究しましたが、研究者の中には、私と同じようにほかの藩の能を研究している人がいます。こうして、いろいろな研究者によって各藩の能が研究され、データが集まることで、江戸時代に行われていた能の全貌が見えてくるというわけです。

研究の面白さ

自分の関心に応じて切り口はさまざま

能の歴史研究の面白さは、これまでだれもきちんと調べたことがない古い史料に、直に触れられることです。

特にわくわくするのは、新しい発見があったときです。『弱法師（よろぼし）』といって、今もよく上演される人気の曲目があります。この『弱法師』は、世阿弥の時代につくられた作品ですが、その後、上演がしばらく途絶えていました。しかし、江戸時代、5代将軍の徳川綱吉のときに復曲になったとされていて、市販の解説書などにもそう書かれています。ところが、盛岡藩の史料を調べているうちに、綱吉の時代よりも前に『弱法師』が上演されていたことがわかったのです。とても印象深い経験となりました。

大学院生の中には、「黒川能」といって山形県の鶴岡市に古くから伝わる能を研究している人もいれば、海外で能がどのように上演され、評価されているかを研究している人もいます。自分の興味関心に応じて、いろいろなアプローチで研究できるのも、能楽研究の面白いところです。

青柳さんの1日

- **4:00** 起床　朝の支度が済んだあと、好きな小説を読んでリラックス。頭が回り始めたところで、朝の勉強を開始。能楽研究の論文を読む。
- **9:30** 法政大で調べもの　法政大の能楽研究所で調べ物をよくする。史料を開いて、重要事項をノートにメモ。
- **12:30** 登校　早稲田大に移動。昼食をとる。
- **14:30** ゼミ　テキストは世阿弥の『申楽談儀（さるがくだんぎ）』。ゼミ生や先生と一緒に、書かれている内容を解釈する。
- **19:30** 帰宅　自宅に帰り、夕食をとる。
- **22:00** 就寝　朝型のため早く寝る。

高校生へのメッセージ

自分探しをするより社会に目を向けよう

皆さんの中には「私の個性って何だろう?」と、自分探しに一生懸命な人も多いと思います。でも、自分のことだけに目を向けていても、すべきことやしたいことは見えてきません。

普段から新聞やテレビのニュースなどに触れて、世の中に関心を持つことが大事です。すると「今の社会の中で、自分はこんな役割を果たすことができるかも」という将来像が自然と見えてくるものです。広く社会に目を向けながら、勉強に励んでください。

用語解説

❶ 観世寿夫
1925年生〜78年没。能役者として能舞台で活躍するほか、現代演劇の舞台にも積極的に出演。世阿弥の伝書研究でも知られる。

❷ シテ／ワキ
シテは、能における主人公のことをいい、能面を付けて演じられる。亡霊や鬼、神など、人間ではない、超自然的な存在を演じる場合が多い。一方、ワキはシテと出会い、シテがこの世に残した思いなどを語るときに、聞き手の役割を担う。ワキの役柄は、旅人や僧侶など生身の人間である場合が多い。シテ方（シテを専門に演じる能役者）とワキ方（ワキを専門に演じる能役者）は、役割が明確に分かれており、シテ方がワキを演じることはなく、その逆もない。

❸『卒都婆小町』
『卒塔婆小町』とも書く。年老いて物乞いとなった小野小町が主人公（シテ）の曲目。「小町物」といって、小野小町は能の題材によく用いられており、ほかにも『通小町』や『関寺小町』などの曲目がある。

❹ 式楽
幕府の儀式に演奏される音楽や舞踊のこと。式楽に定められたことにより、能は江戸幕府から手厚い保護を受けた。同時に、管理の対象となり、自由な発展を妨げられた。

❺ 精神史
ある時代の出来事や現象と、その時代を支配していた世界観や思想との関係性を探る研究方法。

VIEW'S REPORT

学びの意欲の本質に迫る体験型学習を目指して

ベネッセコーポレーション「キャリア・エデュケーション・プログラム（CEP）」の取り組み

前編

高校生の学びの意欲を高めるために、今、各高校では教科学習や学校独自の活動の時間などで、さまざまな取り組みを行っている。特に、企業訪問や職場体験などの学外活動を積極的に展開する学校が増える中、学びの意欲の本質に迫る効果的なプログラムとは何か、ベネッセコーポレーションが有力企業と協同で行う研究事業を通して考えてみたい。

体験型学習を教育効果の高い取り組みにするために

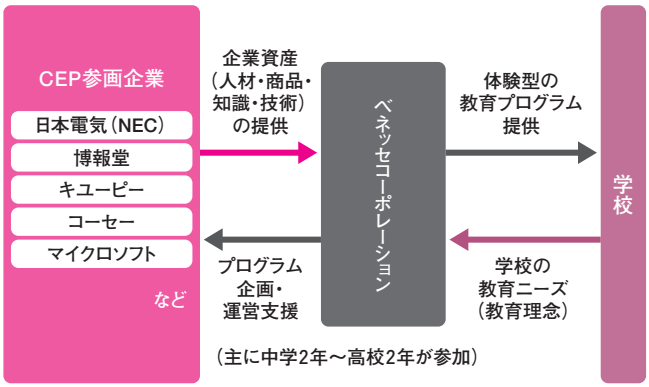
ベネッセコーポレーション中等高等教育支援室では、2007年度からキャリア・エデュケーション・プログラム（以下、CEP）という体験型学習の研究事業を実施している。

CEPとは、多様な業種の有力企業と連携し、体験型のキャリア教育プログラムを中高生に受講してもらうというものだ（図1参照）。この研究事業の目的は、学校による企業訪問や職場体験が活発になる中で、体験型学習をより教育効果の高い探究的な学習にまで高めるにはどうすればよいか、その方法を検証することにある。

近年、生徒の学ぶ意欲の低下を指摘する声は多い。核家族化の進行や地域の大人との関係性の希薄化などにより、生徒がロールモデル（目標にできる大人）に出会う機会が少なくなっていること、学校や塾での学習内容と社会とのつながりが見えにくいこと、更に、大学入試の競争緩和に伴い、入試が学習の動機付けになりにくくなったことなどがその要因として考えられる。そうした中で、学校が企業と連携して実施する体験型学習は、生徒がロールモデルとなる大人と出会い、グループワークで探究を深め、学びと社会とのつながりを体感（文脈学習）する上で有効な手法だと考えられる。

次ページより、自校で独自の体験型学習を展開しており、CEPにも参加された3校の先生方に、体験型学習を教育効果の高い取り組みにするためのポイントについて語っていただいた。

図1 CEPの仕組み



座談会

西武学園文理中学・高校 × 聖光学院中学校・高校 × 鷗友学園女子中学高校

社会を知り、学びとつながる体験型学習とは何か

「待つ」ことができない教師、大人が増えている

――まず、生徒にとって体験型学習はなぜ重要なのかをおうかがいしたいと思います。

土岐（西武） 最近の子どもたちの特徴の一つとして、「正解主義」が挙げられます。入試を経て進学してくる生徒たちは、長い間、正解を選ぶことを求められる勉強を続けてきており、実際、試験で正解が多い生徒が、入試でも合格するわけです。

この「与えられた問題に、常に正解を出さなくてはならない」という生徒たちの意識は、入試の場面だけではなくて、中学校入学後も続きます。そのため自信があるときは手を挙げて答えることができるけれど、不正解の可能性があるものについては、失敗を恐れ、決して自ら前に出て積極的に発言しようとはしません。

なかなか答えが見つからず、試行錯誤の先に新しい発見に出合うという経験が、本当の意味で学びの血となり肉となります。その経験を子どもたちに積ませる上で、解答が一つでない命題に対して、主体的に考え、解決策を見いだす体験型学習が有効だと考えています。

工藤（聖光） すぐに正解を求め、教えたことしかやろうとしない子どもが増えているというのは、私も実感していることです。

ただしこの問題は、子どもに責任があるわけではありません。彼らを受け入れる教師の姿勢が、子どもたちに影響を強く与えていると私は考えています。子どもたちが試行錯誤しながら答えを見つけだすまでの時間を、「待つ」ことができない教師、大人が多くなっているのです。

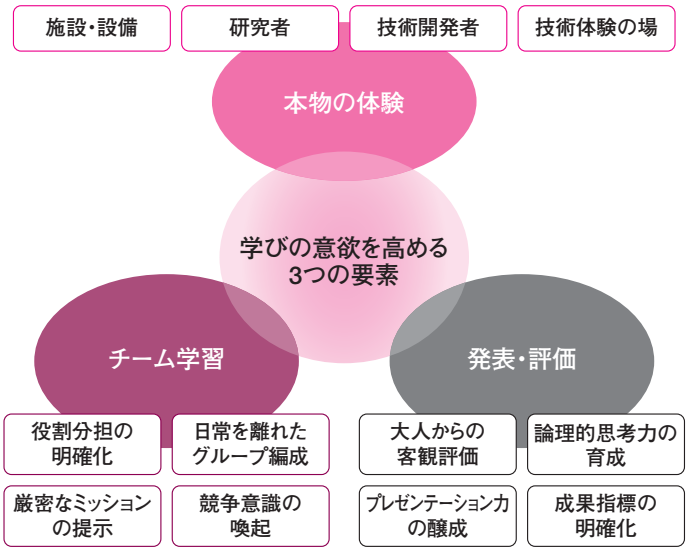
中等教育というのは、その一つ上に高等教育があるわけで、中等教育に携わっている教師は常に進学実績という成果を求められます。手っ取り早く成果を上げようとするならば、教えた方が楽だという意識になって、何でも教え込んでしまう。一方生徒も、「教えられたことだけをやる」という意識から抜けられません。教師は中等教育段階で生徒にじっくり考えさせる工夫ができないまま、悪循環に陥っている気がします。

西武学園文理中学・高校教頭 土岐惣亮 Toki Sosuke

聖光学院中学校・高校校長 工藤誠一 Kudo Seiichi

鷗友学園女子中学高校校長 清水哲雄 Shimizu Tetsuo

図2 CEPで見えてきた教育効果を高めるポイント



自分で答えを見つけだすまで、待つことを大事にしよう」と、いつも先生方には話しています。

例えば本校では、高1の化学の時間を使って「これは何か?」という授業を行っています。生徒を2人1組に分けて、白い粉の入った容器を渡し、何の薬品が入っているかを自分たちで調べさせるわけです。10本の容器に入っている薬品は、すべて異なります。

生徒は中3までの間で、基本的な実験の手法については学んでいます。そこで生徒たちは「この実験を行ったときに、こういう化学反応が起きたならば、この薬品である可能性が高い」といった仮説を立てながら実験に取り組み、少しずつ薬品の正体を絞り込んでいきます。ところがほとんどの班は、薬品の正体を突き止めることに失敗するのです。

これなどはまさに、生徒が失敗することを前提とした授業です。生徒が答えを見つけ出すまで待つのですが、生徒が出した答えが正しいとは限りません。けれども正解主義に陥っている生徒にとっては、その失敗が貴重な体験になるわけです。生徒に対して「間違ってもいいんだよ。また挑戦して、自分の力で正解を見つけ出すことが大切なんだ」というメッセージを発しながら、教師の側はじっと待つ。「なぜだろう」「何だろう」と深く考えさせ、失敗を認める教育を、本校では重視しています。

土岐（西武） いきなり生徒に薬品を渡すと、テストでは優秀な成績を収める生徒ほど、どう扱えばよいのか戸惑いませんか。

清水（鷗友） 確かにそうです。生徒たちはテストで問題を出されたときに、正しい答えを書く知識はあるのですが、「その知識を使って、実際にやってみなさい」と言われると、できない子が多いですね。

一例として、中1の生徒に、「ガスバーナーが最も効率よく燃えているときの炎の色は何色か」と聞くと、みんな「青い炎」と答えます。ところが「ではマッチでガスバーナーに火をつけて、青い炎にしてみてください」と指示をすると、子どもたちはすごく苦労します（笑）。

工藤（聖光） 確かに今の子どもは、知識が断片的で、覚えた知識を活用したり、応用する力が弱いですよね。いわば、知識が探究活動につながっていかないのです。本校では、学校外の専門家を講師としてお迎えして、「聖光塾」を開講しています。昨年度は、「里山」「海辺」などの自然体験、バイオ実験、写真芸術などの16講座を開講しました。中学では、フィールドワークを重視しており、自然を体験したり、これまでに学んできた知識を自然を通して確認できるようにしています。子どもたちが知識過多になっている時代だからこそ、自分の五感を使って体験する学習が意味を持ちます。生きる力や教養を身に付ける機会を提供することは、中等教育の使命ではないでしょうか。

土岐（西武） 本校でも、昨年からロッテの本社商品開発部と連携して、中3生全員に新商品開発に取り組ませています。ねらいは先ほどお話ししたように、「子どもたちが自ら考えて、一つではない答えを見つけ出す体験をする」ことにあるのですが、

仲間たちと一緒に考え答えを見つけだす体験活動

清水（鷗友） 今、工藤先生が話された「待つ」姿勢の大切さは、本校でも重視していて、教師同士の合い言葉にしているんです。

確かに教え込む教育の方が、教師にとっても生徒にとっても楽でしょう。けれども楽ではあっても、生徒の知的好奇心をくすぐるような学びにはなりません。ですから「生徒が

もう一つのねらいとして、コミュニケーション能力の育成があります。KY（空気が読めない）という言葉がある通り、今の子どもたちは仲間同士で摩擦が起きることを怖がる傾向が強く、自分の本音や意見をなかなか述べようとしません。

ところが、個人ワークとグループワークを組み合わせながら、生徒たちはお互いの意見をぶつけ、考えや立場の違いを理解しなければ前に進めません。新商品開発を通じて、「みんなで協力しながら、ゴールにたどり着く」という体験をさせたいわけです。

同じクラスの生徒でも、最初は全く議論ははずみませんが、成果発表の日が間近に迫ってくると、見事なまでに生徒たちの様子が変わってくる。生徒たちの発表は大人の我々も驚くもので、昨年は生徒が出したアイデアが採用されて、商品化されました。店頭に商品が並んだことで大きな自信を得たはずです。

企業の人材や技術に触れることで「学びの意欲」が高まる

――CEPでの研究を通して、見えてきたものは？

CEP事務局　2007年よりCEPと題して企業との連携による体験型学習プログラムの研究を開始しました。これまでに10社・10校にご協力いただき、計21回のプログラムを実施してきました。参加者は722人に上ります。その結果、体験型学習で生徒の学びの意欲を高めるためには、**「本物の体験」「チーム学習」「発表・評価」**の三つの要素が重要だということがわかってきました。

まず、**「本物の体験」**とは、文字通り生徒が本物に触れることです。一般の工場見学や職場訪問では、企業の広報担当者がガイド役となり、企業の取り組みや仕事を紹介する場合があります。しかし、CEPでは、例えば商品開発ならば「商品開発の現場担当者」が自ら講師となり、実際の仕事内容や技術、更に仕事へのこだわりを語ります。講師は、生徒に比較的年齢が近く、ロールモデルになりやすい30歳前後を中心にしました。またプログラムの内容は、企業や職業の概略を学ぶ「お試し体験コース」ではありません。生徒には、「プロはここまでやるんだ」という実感が得られるように、企業が得意な技術分野などをテーマにした少し難度の高い課題を与えます（**P.44図3**）。

例えば、マイクロソフトのプログラムでは、1日がかりで四足歩行ロボットを製作し、ロボットが歩くための足の動かし方を考えました。また全日空のプログラムでは、整備士の新人研修の課題に挑戦しました。その結果、参加した生徒の多くは「大変だったけど、達成感がある」「こんなに一つのことを深く考えた経験はなかった」などの感想を残しました。このような「限界突破体験」が、学びの意欲を高めると考えています。

「チーム学習」では、生徒が仲間と一緒に試行錯誤できるように、「複合的な課題」を与えました。例えば、マイクロソフトのプログラムでは、「ロボットの組み立て（ハードウェア）」「動作のプログラミング（ソフトウェア）」「操作パネルのインターフェース（デザイン）」など、複数の専門的な技術が問われます。

最後には**「発表・評価」**がありますので、自分たちが苦労して作ったロボットの魅力を伝えるプレゼンテーション力も問われます。これらの課題を、1人の生徒がやりきることは困難です。そこで生徒たちは、そ

マイクロソフト本社で発表会を開催。中3、高1の生徒が、ロボットレースやプレゼンテーションを実施

全日空では、ブロックを使って整備士の新人研修で行われるゲームを体験。他班作成の設計図に従い正確に模型を再現

れぞれの得意分野を相談し、協力して課題に取り組みます。このようにチームワークを発揮せざるをえない環境をつくることで、生徒は互いに学びの意欲を高め合うことができるのだと考えています。

工藤（聖光） ＣＥＰに企画参画して良かったと思うのは、企業で働いている方と、直に触れ合う機会を持てたことです。今の子どもは、保護者や教師以外の大人と接する機会が少なくなっています。ともすれば、今の子は「サラリーマンになるのはいや」と答えます。彼らの口から出てくるのは、弁護士や医者、公認会計士といった職業です。つまり、生徒たちはサラリーマンを、非常に狭いイメージでしか思い描けていないのです。実際に企業で働いている人に会うことによって初めて、彼らは企業には多様なキャリアを持っている人が、それぞれ志を抱きながら働いていることに気づくわけです。

清水（鷗友） その点は私も同感です。昨年度はＣＥＰの「10年後の働き方を体験しよう」（**図3参照**）というプログラムを受講して帰ってきた生徒たちの表情が、見違えるように生き生きしていました。聞けば、講師役の女性社員の方々から、自分の10代からのキャリアグラフを基に、進路選択、挫折、実績の積み上げなどを経て、今どんな思いを持って仕事をしているのかを、じっくり聞くことができたようです。生徒たちは、文理選択・学部学科選択を経て大学に進学し、その後の職業選択も、一本のレールで進むといったイメージを持ちがちです。しかしこのプログラムでは、生徒たちは「自分が働いている10年後」をまさに現実感をもってロールモデルとしてイメージできたはずです。これはとても貴重な学びになりました。

土岐（西武） ＣＥＰのように学校以外の場所で生徒に体験学習をさせるときには、生徒がそこでどんな体験をしてきたかを、教師がきちんと把握することが重要だと思います。生徒が体験型学習で得た知的好奇心や興味・関心を、学校の授業にうまく生かすことができるかが、ポイントなのでしょう。例えば、昨年参加した「どうして飛行機は飛ぶのだろう」では、講義の時間に飛行機の揚力の原理を「数学」の理論をひも解いて、話してもらっていました。これなどは学校の教科書が、社会や原理とつながっていることを実感できたのではないでしょうか。

また、本校の理数科では、高1・2年生の1年半をかけて「先端科学講座」と題して、授業時間にＣＥＰを実施しています。昨年から「ロボットを作ろう、動かそう」を受講した現高2・3年生は、9月の文化祭で作品発表会を行いました。元は四足歩行ロボットだったものが、クモやヘビのような生き物になったり、人気アニメのキャラクターを模してデザインされるなど、複雑な動作設計を組み立て、生徒の創意工夫が存分に発揮されていました。これは、体験に知的触発を受けた生徒たちが自ら発展させたものです。体験型学習は確かに必要ですが、それだけを行っていれば生徒が変わるわけではありません。単発のイベントに終わらせず、そのほかの教育活動と有機的に結び付けていくことが大切です。

清水（鷗友） 体験的な学習やキャリア教育などを通じて、生徒に学ぶ意義を認識させることの必要性は、文科省も改めて発信しているところです。生徒の学力を伸ばそうと思えば、授業時数や補習の時間を増やすことよりも、生徒自身に学ぶ意義を実感させて学習意欲を高める方がはるかに有効です。体験型学習に積極的に取り組む学校や先生が、1校でも1人でも増えてほしいですね。

（敬称略）

図3　CEPの研究活動テーマ（2007年度～）

日本電気（NEC）	PaPeRoで体験するロボット開発
博報堂	伝える力を鍛えよう!～広告を創る
キユーピー	こんなマヨネーズがほしい!～食文化を知る
コーセー	健康な肌を保つために!!～研究者の仕事を知る
マイクロソフト	ロボットを作ろう、動かそう
全日空（ANA）	どうして飛行機は飛ぶのだろう
NTTデータ	10年後、ITはどう暮らしを変えるだろう!?
NTTドコモ	携帯電話は、私たちの暮らしをどう変えるのか
ソフトバンクテレコム	10年後の働き方を体験しよう
東京電力	MACC、エコキュートの秘密～環境問題を考える

※上段は2008年度（9月末日時点）の継続参画企業

◎次号、後編は、キャリア・エデュケーション・プログラム（ＣＥＰ）の具体的な取り組みをレポートします

東京ウォッチテクニカム

自ら思考し行動することがプロ意識を養う

一流時計技術者の育成を目指す50年の大計

スイスで培われた高度な時計技術の継承を目指し、2003年に開校した学校「東京ウォッチテクニカム」。
自立性に重点を置いた厳格な教育方針の背景にあるのは、
単に「技術を知っている」だけではない本物の技術者を世に送り出そうという、揺るぎない信念だ。
開校から５年、その現状と、将来に向けてのヴィジョンを聞いた。

プロジェクトの船出

「最初に話が出たとき、『このプロジェクトに〝完成〟はありません。答えが出るとしたら50年後です』っていったんですよ、私」――時計技術者育成の学校「東京ウォッチテクニカム」で校長を務める羽立昌代さんはそう語る。

「このプロジェクト」を立ち上げたのは、世界に名だたるスイスの時計メーカー、ロレックス社。国やブランドを越えて活躍できる一流の時計技術者を育て、伝統的なスイス時計技術の真髄と哲学を次の世代へ継承していこうという、自社のみならず時計業界全体への貢献を目指す一大プロジェクトだった。

そのきっかけとなったのは、時計業界における「技術者の空洞化」である。１９７０年代、クオーツ時計の登場によって機械式時計産業は大きなダメージを受け、時計技術者を目指す若者の数も激減した。このため、現在の時計業界は、40～50代の技術者の不足という事態に直面しているのだ。

「ロレックスは、その状況に『このままでは伝統的な時計技術や理論が廃れていってしまう』という危機感を抱いたんですね。そして、スイスの教育機関〝ＷＯＳＴＥＰ〟に協力を受けての学校設立に乗り出したのです」と羽立さんは説明する。

ＷＯＳＴＥＰは66年に設立された、時計技術者のためのトレーニングセンター。運営は多数の時計関連企業の出資によるが、どこの企業にも属さない公平中立の方針を貫いている。ロレックス社は、このＷＯＳＴＥＰの認定を受けた「パートナーシップ校」の設立に向けて準備を開始した。

しかし、ＷＯＳＴＥＰはパートナーシップ校に対して、カリキュラムはもちろん学生一人あたりの保有スペース、使用する工具についてなど非常に厳しい基準を設けている。教師たちも、スイスのＷＯＳＴＥＰ本校での

東京ウォッチテクニカム Profile

2003年、「スイス時計技術の真髄と伝統の継承」を理念に掲げて設立された、時計技術者育成の学校。日本には2校しかない、スイスの時計技術者教育機関「WOSTEP」のパートナーシップ認定校である。2005年3月、初の卒業生を時計業界へ送り出した。

機械式時計

◎電池で動くクオーツ時計と異なり、ゼンマイを動力源とする。16世紀ごろからスイスなどヨーロッパを中心に発展。1970年代、安価で高精度のクオーツ時計に押されて衰退したが、近年、再び人気が高まっている。

東京ウォッチテクニカム

自ら思考し行動することがプロ意識を養う

一流時計技術者の育成を目指す50年の大計

専門教育を受けなければ教壇に立つことができない。

「50年かかる」プロジェクトの最初の時期は、そうしたさまざまな準備に費やされた。世界で14校目のWOSTEPパートナーシップ校として東京ウォッチテクニカムが船出したのは、03年4月のことである。

教師も生徒も「真剣勝負」

東京・東陽町のキャンパスに足を踏み入れると、その広さと清潔さ、そして設備の充実ぶりにまず目を見張らされる。約950平米の広々としたフロアに、生徒は1学年12名、2学年合わせて24名という少人数制。教室には、生徒一人ひとりのための作業台や機材が備え付けられている。

生徒たちはここで、WOSTEPが定めた3000時間のカリキュラムを2年間で修了する。驚かされるのは、入学してからの8か月間は「時計」に触れることができない、ということだ。

最初に課題として与えられるのは、時計ではなく「工具」の製作。初めは柔らかい木を使い、それに慣れたら金属へ。1本の金属棒などの素材を加工して、自分たちが使う工具を一からつくり上げていく。

完全な「平面」とはどういうものなのか。45度という角度は、1ミリという長さはどのくらいのものなのか。技術者に必須のそうした指先や目の感覚を、生徒たちはひたすらに作業を重ねながら身体に覚え込ませてゆかねばならない。工具づくりは、それに最適なトレーニングなのだ。

工具の次は時計の部品製作に取り組み、2年間を終えるころには時計修理に関する全工程をこなせるようになる。しかし、そこまでに到る道のりは楽なものではない。2年間で5回の中間試験があり、各1回認められている追試験に合格できなければ退学が勧告される。甘えや油断は一切許されないだけに、課題に取り組む生徒たちの目はこの上なく真剣だ。

また、試験の評価方法も独特である。生徒の試験課題作品は、東京ウォッチテクニカムの教師たちがまず評価した後、スイス本校へ送られてそこで再評価される。教師が「正しい評価を行えているか」のチェックも兼ねているわけだ。

ここでは、生徒のみならず教師たちも、そのようにして常に評価にさらされ続ける。スイス本校でのトレーニングも毎年受講しなくてはならない。羽立さんは「教師以外のスタッフもそうです。常にブラッシュアップしていかないと、とても理想とするレベルには到達できません」と語る。生徒にもスタッフにも、身の引き締まるような真剣さが要求される環境なのである。

理論と技術を兼ね備えてこそ

カリキュラムの中で特徴的なのは、時計修理の「技術」と共に、「理論」学習が二本柱の一つとして挙げられていることだろう。その理由を羽立さんはこう説明する。

「もちろん、理論だけを身に付けた頭でっかちでは意味がありません。でも、時計というのは、持ち主や環境によって状態が違ってきますから、予想外の、とんでもない状態になった時計を修理しなくてはならないときもある。そんな時に状況を的確に見抜く力、そして対処法を考えるための知識。そういったことを身に付けるために、理論のプログラムがあるんです。その意味では、技術も理論も目指すところは同じなんですね」

また、塵一つ落ちていない教室が物語るように、掃除や整理整頓についての指導が非常に厳しいことも、この学校の特徴の一つだ。朝はまず雑巾がけから、工具を収める引き出しは常に整然と美しく……。それだけを聞くと、昔ながらの「職人」世界の伝統、といったものをイメージしそうになるが、必ずしもそうではないのだという。

例えば、掃除を徹底するのには、繊細な時計の部品を埃や水気から守るという意味がある。引き出しの中を整理しておけば、必要な工具がすぐに取れて作業がスムーズだ。「昔の人の知恵が非常に素晴らしいから、それをそのまま受け継いでいる」のであって、伝統を無条件に追いかけているわけではない。

しっかりとした理論と、それに裏打ちされた確かな技術の両方を身に付けてこそ、技術者は初めて技術者たり得る。その信念が、ここにはあるのだ。

〝これでよし〟はない

生徒募集の時期には、12名の定員の10倍以上もの希望者が集まる。年代も前職も実にさまざま。「今の日本社会がすごく反映されている気がしますね。〝物づくりでご飯を食べたい〟という人や、デジタルなものに不安を感じてアナログに惹かれたという人。〝どうしていいか分からないけど、何かできそうな気がして〟という人も(笑)」。

現在、選考は適性検査と面接・実技試験の二次にわたって行われている。問われるのは、時計修理に関する知

東京ウォッチテクニカム校内の授業風景

識や技術というよりも、物の見方や考え方、さらには時計技術者の厳しい世界に足を踏み入れる覚悟があるかどうかだ。基準に到達する者がいない場合は無理に定員を満たすことはしないといい、08年度も入学を許可されたのは11名のみだった。

これまで、面接で何百人という若者を見てきた羽立さんは、現在の学校教育に関してもしばしば疑問を感じるという。「理論的に物を見たり、考えたりする力が欠落している人が非常に多いように感じます。今の学校では、何を学ぶにしても、〝なぜそうなのか〟という部分を考えないからじゃないでしょうか。入学後の生徒と接していても、『どうしてそこで〝なぜ？〟って考えないの』ということが多いですね」。

東京ウォッチテクニカムの教育において、何よりも重視されるのは「自主性」である。「何かあれば誰かが助けてくれる」といった考えは一切通用しない。「ここでは、誰も何もしてくれませんから」と羽立さんは笑う。

例えば、授業には決まった時間割がなく、課題を終えた生徒は次々に先へ進んでゆく。取り残されて焦っても、誰かが何かをしてくれるわけではない。教師はあくまでアドバイスをするのみ、やるのは自分でしかないのだ。

さらに、授業についていけていない生徒に対しては、容赦なく退学を勧告する。「時計技術者の道がその人に合わないのであれば、早く次の道を見つけた方がその人のためによい。『このままじゃあなたはだめ。物事の見方、考え方を変えるか、退学か、どっち？』とズバッといいます」。

また、押しつけの就職斡旋も一切行わない。「自分の人生だから、自分が仕事をしたい所で仕事をしなさい」というのが基本方針だ。「だから、〝自分〟がない子はなかなか就職が決まりません。周りが決まり出して焦ってから、やっと〝どうしよう〟と考え始める。そんな時も〝どうしなさい〟とはいいませんね。どうしたらいいのか、自分で考えさせ、結果が出せるように導きます」。

そうした、否応なく自分と向き合わなければならない環境の中で、生徒たちは、理論的な物の見方や考え方、そして自分で決めて行動する力といったものを、叱咤激励されながら身に付けてゆく。「でも、そういったことは本来、何にでも通じることですよね。私たちはたまたま時計というものを媒体にしていますが」と羽立さんがいうように、一流の時計技術者を育てるということはまた、世界に通用する、一流の「ひと」を育成するということでもあるのだろう。

「最終的には、時計業界のリーダー的存在になれるような人材を育てたい。でも、そう簡単にはいきません。日々努力ですね。学生がではなくて、まず私たちが。まだまだ発展途上の段階なんです」という羽立さん。「このプロジェクトに〝完成〟はない」――その思いは、今も変わらない。現在進行形で、試行錯誤と真剣勝負の日々が続く。

地方公立高校の挑戦

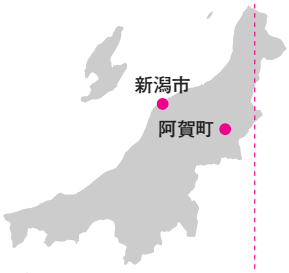
定員割れの危機から地域の進学校へ――

地域唯一の高校として、存続が使命となっている地方の郡部や山間部の学校では、小規模ながら大学、専門学校、就職と、志望が異なる生徒を抱えて、どのような教育を行っているのか。入学定員割れの危機から再起しつつある二つの学校の取り組みを紹介する。

Challenge

新潟県立 阿賀黎明中学校・高校

創立100年を超える伝統校の存続を中高一貫化に賭ける



阿賀町は
新潟駅から車で約70分

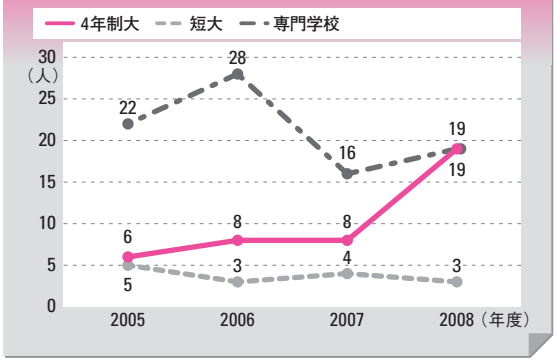
地域活性化の起爆剤として併設型中高一貫校に

新潟県立阿賀黎明中学校・高校は、全国でも珍しい中山間地に位置する併設型の中高一貫校として2002年度に誕生した。その1期生が08年春、卒業を迎えた。大学・短大進学者数は、前年度の12人から22人に増え（卒業生数64人）、うち国公立大進学者数は7人に上った（図1）。

同校が位置する阿賀町は、人口約1万5000人、福島県に隣接する町だ。経済状況の停滞や都市部への人口流出、少子・高齢化が止まらない。同校の母体である旧津川高校は1902年に創立された県内屈指の伝統校で、昭和40年代には生徒が1000人以上いた。それ以降、生徒数は減り続け、2000年度には募集人員が3学級から2学級へと縮小。統廃合の危機が迫っていた。しかし、阿賀町に高校は一つしかない。

「地元の高校を何とか存続させることはできないだろうか……」という地域からの要望を受け、地域活性化の起爆剤として中高一貫校に生まれ変わった。そして、地元の成績上位層が新潟市内の進学校へ進む流れを変えるために、大学進学指導に力を入れた教育方針を打ち出して船出した。

図1 進路状況の推移



中学校段階から学習習慣を徹底させる

田辺智洋先生が着任したのは5年前、1期生が中学2年生に進級

図2 生活記録表（中学校用）

中学校の生活記録表は、時間割や行事予定も記載し、コメント欄を設けて、１日の過ごし方をより意識させるつくりになっている

した年だ。常勤講師も含めて30人弱の教師しかおらず、中学籍の教師が高校生を、高校籍の教師が中学生を教える。高校の数学教師である田辺先生にとって、中学生を教えるのは初めての経験だった。

「中学校の指導書を読み、中学校の先生に相談しながらという手探りの状態でしたが、中学校での教え方が、高校での授業にも役立ちました。例えば、二次方程式や因数分解などの基本が、高校生のつまずきの元になることが多いですが、これらをわかりやすく伝えることに関して、中学校の指導法は優れていると思います」

毎日の宿題や週末課題など、家庭学習習慣を定着させるための指導は、中1段階から徹底して行う。中学校では「生活記録表」、高校では「学習記録表」に学習の記録を付けさせ、担任がチェックする（**図2**）。学習時間が少ない生徒に対しては、個別に声をかけ、コミュニケーションを取りながら指導している。

更に、毎日の朝学習も6年間続く。毎週火曜日には全校一斉漢字テストを、それ以外の曜日は学年ごとに小テストを行う。全校一斉漢字テストは、全クラスの結果を集計し公表している。中学生が高校生よりも高得点を上げることもあり、生徒にとっては良い刺激となっているようだ。

また、中学校では英語と数学で少人数授業を、高校では両教科に加えて古典でも習熟度別少人数授業を展開するなど、生徒の学力に応じた指導を手厚く行う。

こうしたきめ細かな指導を支えているのが、2人担任制だ。岡村澄江教頭は「本校は生徒の学力層が広いため、担任を2人付けて、一人ひとりの生徒を見るようにしています」と話す。

大学・専門学校・就職の進路指導に全教師が連携

高校からは外進生（高校入試による入学者）1学級分が加わるが、学習習慣が身に付いた内進生と外進生の学力の差は大きく、別学級だ。高2からは内進・外進にかかわらず進学クラスと就職クラスに分かれ、教科書とカリキュラムも別となり、進路指導も本格化する。

生徒の志望は、大学、専門学校、就職が3分の1ずつとなり、指導は難しい。高校籍の宮入雅史先生

School Data

新潟県立阿賀黎明中学校・高校

設立	中学校:2002（平成14）年／高校:1902（明治35）年
形態	併設型中高一貫校／普通科
生徒数	中学1学年約40名／高校1学年約60名
08年度進路実績	国公立大には新潟大4名、山形大2名、富山大1名の計7名が合格。私立大には明治大、法政大、新潟薬科大、金沢工業大などに延べ18名が合格。
住所	〒959-4402　新潟県東蒲原郡阿賀町津川361-1
電話	0254-92-2650
Web Site	http://www.agareimei-jh.nein.ed.jp/

◎左から… **宮入雅史** 高校3学年担任・進路指導部
加藤 弘 校長
岡村澄江 高校教頭
田辺智洋 高校進路指導主事（前3学年担任）

は次のように話す。

「3つのベクトルがある状態で、クラス一斉の進路指導は難しい。担任で役割分担をするなどの工夫が必要です。2人の担任、副担任だけでなく、クラスや学年を超えての協力が重要になります」

就職は9月、専門学校は10月、推薦入試は11月、12月以降は一般入試とピークがずれるが、時期ごとに全教師が連携して指導にあたっている。

1期生としての自覚が芽生えて

教師の熱意が伝わったのか、07年度の高3生の中には、大学進学希望者の学習グループができた。高3の10月を過ぎると就職が決まる生徒もいて、学校の雰囲気が浮き足立つこともある。しかし、そのグループは毎日のように、休み時間に問題を出し合い、一緒に学校に残って勉強をした。

「自分たちが頑張らないと」

1期生にはそうした自覚が見られた。入学当初、県内初の公立併設型中高一貫校としてマスコミに紹介されたこともあり、1期生とその保護者には「注目されている存在」という意識があったのだろう。

08年度のセンター試験は19人が受験。教科によっては、平均点が県内の進学校を上回った。これまで志望校に上らなかった難関大に挑む生徒が現れるなど、目的意識の高まりも見られた。1期生の担任を中3から4年間務めた田辺先生は、こう振り返る。

「1期生担当の教師は皆、何とかして生徒の進路希望をかなえてあげたいという思いを共有していました。大学進学への意識の高い家庭の子どもが入学してきたのも、一つの要因でしょう。そういった生徒と一緒に生活する中で、ほかの生徒も刺激を受けて、目的意識が高まったのだと思います」

お金と時間をかけなくても地元から大学進学できる

「大学に進学すると、地元に戻らないのではないか」と不安を抱き、「大学より短大、短大より就職」と考える保護者もいる。しかし、同校の開校によって、小学校段階から子どもの適性に合った進路を保護者が考えるようになるなど、地域では教育に対する関心が高まっているという。

ただ、同校を取り巻く環境は依然として厳しい。2期生（現3年生）では、内部進学をせずにほかの高校に進学した生徒が13人もいた。成績上位層が、町立中学校を経て新潟市内の進学校を目指す流れも変わっていない。開校以来、中学入学段階では定員40人をほぼ満たしてきたが、08年度の新入生は29人に落ち込んだ。

だが、宮入先生は「本校の進学実績が上がれば、『地元でも大丈夫』という気運が高まるはず。学力の高い生徒にもっと入学してもらい、校内に刺激を与えてほしい」と話す。同校には、地元の子どもが充実した高校生活を送るための受け皿として存在意義があるからだ。

「町外の高校に通う場合、通学時間がかかるために部活動ができず、勉強だけの学校生活になることも多いようです。勉強と部活動を両立できるのは、本校に通う大きなメリットだと思います」

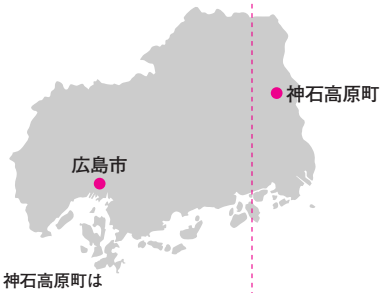
加藤弘校長は、「これまでは『本校でも大学進学は大丈夫です』と言葉で説明していましたが、1期生が実績を残しました。今後、お金と時間をかけて町外の高校に出なくても、大学進学と部活動を両立し、高校生活を楽しめることをアピールしていきます」と意気込む。岡村教頭も「ここが頑張りどころです」と語気を強める。

同校の教師は平均年齢約35歳で、赴任2、3校目という先生が多い。加藤校長が「若手でなければ持たないでしょう」と言うほど、教師全員が日々、学級、学年、中学校・高校の壁を超えて、生徒と向き合っている。中学教頭も週7時間、数学の授業を担当しているほどだ。

中高一貫校の立ち上げにかかわった教師は、全員異動した。人が替わってもつくり上げてきた指導体制を続けるには、「仕組み」だけでなく「思い」も引き継いでいくことが重要だ。同校の活性化が、地元の子どもの学ぶ意欲に、充実した高校生活に、そして地域の活性化につながる——。そうした思いを抱く教師の奮闘は今も続く。

広島県立 油木高校

「どうせ就職」と思い込む生徒を刺激しより高い目標に導く



神石高原町は
広島駅から車で約2時間30分

町ぐるみによる支援活動がスタート

広島県立油木高校がある神石高原町は、中山間地に位置し、人口約1万2000人。65歳以上の割合が4割を超える。主要産業の農林業は低迷し、耕作放棄地（注）の割合は全国でも高く、地域の経済状況は厳しくなる一方だ。

地域で唯一の高校となる同校の生徒は、町立中学校4校の出身者が約9割を占める。少子化の影響を受け、生徒数は減少傾向だ。そこで1993年、地域の有力者らが発起人となって「油木高校を育てる会」を発足。04年度に神石高原町による支援プロジェクトが始まった。同町が年間1000万円（現在は年間500万円）を予算化し、大学入試対応の通信衛星授業の導入をはじめ、産業ビジネス科の再生などを財政面で支援する。

定員割れが続くものの、同校は年々大学合格者数を増やし、08年春の卒業生数52人のうち10人が国公立大に進学（P.52図1）。うち3人は農業を学ぶ産業ビジネス科の生徒だ。国公立大進学率19・2％という、県内の進学指導重点校に匹敵する実績を出した。

「4大受験サークル」を結成 学習指導を徹底的に行う

06年春、国公立大に4名の生徒が合格した。久し振りの朗報によって大学進学の気運が高まったこの年、県内の進学指導拠点校から藤田知久先生が、同じく進学指導重点校から内田昭洋先生が着任した。着任早々、藤田先生が驚いたのは「子どもに勉強をさせると町を出て行ってしまうから、勉強はしなくてよい」という保護者の言葉だ。

「学びを放棄した地域に、未来はありません。勉強をしっかりして、力を付けて地元に戻ってくる人材を育てることこそ必要です。すぐでなくても、10年後、20年後、あるいは30年後でもかまわない。地域のためにも、本校は文化の発信拠点となるべきだと考えました」

保護者には大学進学が地域のためであることを繰り返し訴える一方、生徒への進路指導では、外の世界を見せて刺激を与え、高い目標を持たせるようにした。生徒にオープンキャンパスへの参加を促すだけでなく、センター試験会場となる大学で補習を開催し、大学の雰囲気を肌で感じさせた。

更に、大学進学希望者を集めて「4大受験サークル」を結成。学年ごとに学期に2回実施。内容は各学年主任と各学年の進路担当に任されているが、3年生の入試結果

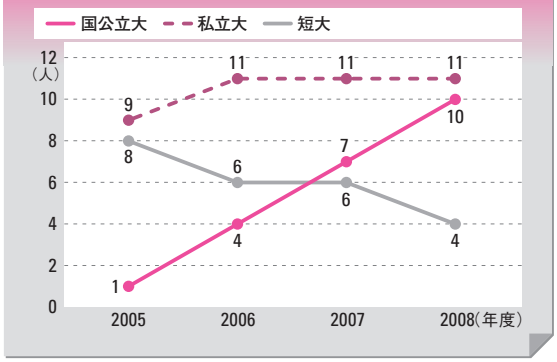
School Data
広島県立油木高校

設立	1922（大正11）年
形態	普通科・産業ビジネス科
生徒数	1学年約60名
08年度進路実績	国公立大は岡山大、島根大、県立広島大などに10名が合格。私立大は立命館大、近畿大、東海大、福山大、広島修道大などに延べ33名が合格。
住所	〒720-1812 広島県神石郡神石高原町油木乙1965
電話	0847-82-0006
Web Site	http://www.yuki-h.hiroshima-c.ed.jp/

◎後列左から… **猪原健二** 進路指導部
速見修史 産業ビジネス科、農場長
竹下弘行 進路指導部長
◎前列左から… **内田昭洋** 進路指導部、1学年主任
藤本 進 校長
藤田知久 広島県立松永高校教頭（前・油木高校2学年主任）

注… 過去1年以上、作物を耕作せず、この数年間に再び耕作するはっきりとした意思のない土地のこと

図1 大学・短大への進路状況の推移



のデータなどを効果的に活用し、大学受験に対する意識を向上させることがねらいだ。

また、学習指導も強化した。教科ごとに予習・復習の仕方、学習計画モデルの提示など、受験勉強の進め方を指導する（図2）。

「定員割れをしている本校では、大学受験で初めて本格的な受験勉強をする生徒が大半です。中学校の基礎・基本、小学校まで振り返らなければならない場合もあります。そうした生徒に、大学合格のためにはいつ、何をどのくらい勉強すべきかを、具体的に提示する必要があったのです」（藤田先生）

目的意識のない生徒に教師が語り、心に火をつける

課題があったのは普通科だけではない。6年前、産業ビジネス科の入学者は入学定員40人に対して14人。午後の実習が始まっても3分の1ほどの生徒の姿がなく、20分も遅刻する生徒もいた。速見修史先生は危機感を募らせていた。

「産業ビジネス科の生徒は目的意識が明確でなく、生活習慣は乱れていました。このままでは、2、3年後には入学者数が1桁になると感じました」

そこで、教育課程の改革に着手。「フラワーアレンジメント」や「アニマルセラピー」といった内容の科目を廃止し、本格的な農業を教える科目にした。

「中山間地では、環境の悪い段々畑でもどうすれば利益が上がる農業ができるのかが課題となっています。生徒には地元の産業を見つめ、自分の頭で考えられる生徒になってほしいと思い、農地を借りて地域ならではの農業を教える授業を取り入れました」（速見先生）

更に、大学進学を意識させるように働きかけた。生徒の多くは「英語や数学をもう勉強したくない」といった考えで産業ビジネス科を選ぶ。そういった生徒に、授業への目的意識を持たせたかったからだ。

速見先生は、農業実習の合間に生徒と畑に座り、「この学校で農業を教える教師に、何で地元出身の人間が1人もいない。大学を出て、教師になって帰って来い」と思いを伝えた。そして、保護者には三者面談の機会を利用し、奨学金や学生寮など、国公立大進学にかかる費用について説明した。

入試は、農業科特別枠の推薦入試に的を絞った。英語が週2時間ほどしかないため、センター試験対策を十分にできないからだ。速見先生は、農学部のある国公立大推薦入試の面接や小論文の内容を詳細に分析し、個別対策を行った。

その結果、産業ビジネス科では2、3年に1人だった国公立大合格者が、07、08年度と連続して3人出た。

"営業担当"教師4人が毎月中学校を訪問

徐々に進学実績を上げていった同校だが、なかなか入学者の増加にはつながらなかった。変わりつつある高校の様子を中学校に伝えるために、4人の教師からなる「生徒募集委員会」を結成。入学者の多い4校を1校ずつ担当し、入学者数の数値目標を設定した。月1回は担当中学校を訪問し、中3生の担任と情報交換をする。生徒に配ってほしい行事案内などは、全校生徒分を印刷して持参する。また、中学校説明会は中学校と連携を取りながら毎年実施。産業ビジネス科の取り組みを中心にしたり、その中学校の卒業生に後輩へ話をさせたりと工夫している。

藤本進校長は、「ここまで丁寧な中学校訪問は、どの先生にとっても初めての経験だと思います。中3生の担任になったつもりで生徒の進路を考えてほしいと伝えています」と話す。

07年度には、地元の中3生を対象に「高校英語入門講座」を始め

た。08年度は5日間、計10時間の講習を、同校を会場に開く。高校入学後、学習面でスムーズに移行できるよう中高接続を意識した取り組みだ。

「本格的な受験勉強を経験しない生徒は、英語の学力レベルが低くなりがちです。高校の授業を知ることで、よい刺激になってほしいと考えています」（藤本校長）

今、後輩へと受け継がれる夢

教師の思いは、生徒に確実に伝わっている。08年春に卒業したある生徒は、「油木高校でも頑張れば国立大に合格できることを証明したかった」と、後輩に語った。「頑張ること、合格することは、自分の希望をかなえることでもあるけれど、後輩に夢を与えることにもなる」と話す卒業生もいた。

08年度3年生の4月時点での大学進学希望者は35%だったが、7月の進路希望調査では52%に増えた。進路指導部長の竹下弘行先生は、「入学時点で大学進学を意識していなかった生徒も、先輩の姿に刺激を受けて、大学も一つの選択肢だと確実に意識するようになりました」と喜ぶ。

進路指導部の猪原健二先生は、大学のオープンキャンパスに専門学校や就職希望者も参加させた。

「本校の進路希望は大学、専門学校、就職が3分の1ずつです。ただ、専門学校や就職希望でも、よく考えずに決めている場合が見受けられました。生徒があまりにも狭い視野で進路を考えているため、生徒全員に大学進学という選択肢を投げかけてみました。今後は、生徒一人ひとりと向き合い、進路を一緒に考えていきます」

08年春の卒業式後、大学に合格した2人の生徒が毎日、だれに言われるでもなく校内の床をワックスがけしにやって来た。それを目にした内田先生は、「受験勉強を通して、生徒たちの間に確実に感謝する気持ちや人間的な深まりが生まれる」と改めて感じたという。

「自分たちと真剣に向き合ってくれた先生を、生徒は信頼してくれたのだと思います。本校は小規模校ですが、教師全員が生徒全員を知っている強みがあります。そのよさを生かし、できることは最大限していきたい。今後、町内の中学生数が減少していくことを考えると、今年が勝負の年です」（藤本校長）

図2　生徒に配付した「学習方法」のプリント／現代社会（3年生）

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	直前
1学期		夏休み	追い込み期		完成期		最終期
青年期等・経済分野		政治分野	反復暗記		過去問徹底演習		予想問題
使用参考書は別途指示					使用問題集は別途指示		予想問題集は別途指示
理論的に理解しなければならない経済分野を絶対に先行させる。		繰り返して覚える。全分野いったん終了。	政治分野は暗記する内容が多くなるので、追い込み期に集中的にする。		過去問題集を徹底的に繰り返し、知識のアウトプット力を鍛える。		知識の穴の最終メンテナンス。
学習量目安							
5時間／週		9時間／週	10時間／週		12時間／週		10時間／週
この時期までは英語・数学・現代文中心			次第に理社にウェイトを		問題で知識を整理		最終チェック
受験した模試はその週のうちに完全復習（覚え込む）							
目標得点率							
50%		60%	70%		80～85%		85～95%

現代社会の学習方法

①暗記しなくてはならない知識量は、日本史・世界史の約半分である。
②したがって、センター試験では同じような問題が繰り返し出題される。
③経済分野を苦手とする受験生が多いが、理論をしっかりとマスターすれば忘れにくい分野である。
④現代社会は知識量だけでなく情報処理能力（知っている知識を組み合わせて答えを導く力）が試される教科である。
⑤理科にも共通するが「理論理解→細部の知識暗記」の順で学習すること。
⑥また「インプット力→アウトプット力」の順に身に付けると効率がよい。
⑦すべての教科についていえるが、模試は予想問題集だと考え、受験直後に間違えた問題の徹底復習をすること。これをしなければ模試は受けるだけ時間の無駄である。
⑧ニュース・新聞などに敏感になり、国内と世界を問わず一般常識を身に付けよう。
⑨用語を覚える際には、意味を自分で説明できるようにすることが必要である。
⑩現代社会のマーク問題は「間違い探し」だと心得よ。選択肢の文章の間違いを見つけるゲームである。
⑪資料の読み取り問題は「知能テスト」のようなもの。必ず答えが導き出せる。

た。08年度は5日間、計10時間の講習を、同校を会場に開く。高校入学後、学習面でスムーズに移行できるよう中高接続を意識した取り組みだ。

「本格的な受験勉強を経験しない生徒は、英語の学力レベルが低くなりがちです。高校の授業を知ることで、よい刺激になってほしいと考えています」（藤本校長）

今、後輩へと受け継がれる夢

教師の思いは、生徒に確実に伝わっている。08年春に卒業したある生徒は、「油木高校でも頑張れば国立大に合格できることを証明したかった」と、後輩に語った。「頑張ること、合格することは、自分の希望をかなえることでもあるけれど、後輩に夢を与えることにもなる」と話す卒業生もいた。

08年度3年生の4月時点での大学進学希望者は35%だったが、7月の進路希望調査では52%に増えた。進路指導部長の竹下弘行先生は、「入学時点で大学進学を意識していなかった生徒も、先輩の姿に刺激を受けて、大学も一つの選択肢だと確実に意識するようになりました」と喜ぶ。

進路指導部の猪原健二先生は、大学のオープンキャンパスに専門学校や就職希望者も参加させた。

「本校の進路希望は大学、専門学校、就職が3分の1ずつです。ただ、専門学校や就職希望でも、よく考えずに決めている場合が見受けられました。生徒があまりにも狭い視野で進路を考えているため、生徒全員に大学進学という選択肢を投げかけてみました。今後は、生徒一人ひとりと向き合い、進路を一緒に考えていきます」

08年春の卒業式後、大学に合格した2人の生徒が毎日、だれに言われるでもなく校内の床をワックスがけしにやって来た。それを目にした内田先生は、「受験勉強を通して、生徒たちの間に確実に感謝する気持ちや人間的な深まりが生まれる」と改めて感じたという。

「自分たちと真剣に向き合ってくれた先生を、生徒は信頼してくれたのだと思います。本校は小規模校ですが、教師全員が生徒全員を知っている強みがあります。そのよさを生かし、できることは最大限していきたい。今後、町内の中学生数が減少していくことを考えると、今年が勝負の年です」（藤本校長）

図2　生徒に配付した「学習方法」のプリント／現代社会（3年生）

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	直前
1学期		夏休み	追い込み期		完成期		最終期
青年期等・経済分野		政治分野	反復暗記		過去問徹底演習		予想問題
使用参考書は別途指示					使用問題集は別途指示		予想問題集は別途指示
理論的に理解しなければならない経済分野を絶対に先行させる。		繰り返して覚える。全分野いったん終了。	政治分野は暗記する内容が多くなるので、追い込み期に集中的にする。		過去問題集を徹底的に繰り返し、知識のアウトプット力を鍛える。		知識の穴の最終メンテナンス。
学習量目安							
5時間／週		9時間／週	10時間／週		12時間／週		10時間／週
この時期までは英語・数学・現代文中心			次第に理社にウェイトを		問題で知識を整理		最終チェック
受験した模試はその週のうちに完全復習（覚え込む）							
目標得点率							
50%		60%	70%		80～85%		85～95%

現代社会の学習方法

①暗記しなくてはならない知識量は、日本史・世界史の約半分である。
②したがって、センター試験では同じような問題が繰り返し出題される。
③経済分野を苦手とする受験生が多いが、理論をしっかりとマスターすれば忘れにくい分野である。
④現代社会は知識量だけでなく情報処理能力（知っている知識を組み合わせて答えを導く力）が試される教科である。
⑤理科にも共通するが「理論理解→細部の知識暗記」の順で学習すること。
⑥また「インプット力→アウトプット力」の順に身に付けると効率がよい。
⑦すべての教科についていえるが、模試は予想問題集だと考え、受験直後に間違えた問題の徹底復習をすること。これをしなければ模試は受けるだけ時間の無駄である。
⑧ニュース・新聞などに敏感になり、国内と世界を問わず一般常識を身に付けよう。
⑨用語を覚える際には、意味を自分で説明できるようにすることが必要である。
⑩現代社会のマーク問題は「間違い探し」だと心得よ。選択肢の文章の間違いを見つけるゲームである。
⑪資料の読み取り問題は「知能テスト」のようなもの。必ず答えが導き出せる。

教師の思い、メッセージを生徒に効果的に伝える！　生きたデータの見せ方・つくり方

今月のテーマ

1年生2学期の成績層別面談指導

指導の重要性

1年生2学期、中でも11、12月は、部活動の大会や体育祭、文化祭といった学校行事も終わり、高校生活に慣れる時期である。高校と中学校の違いを身を持って理解したこのタイミングで、面談を通して学習習慣や生活スケジュール、更に進路面で生徒自身に改善点を見つけさせる。その上で、目標を設定させることは、「慣れ」を「ダレ、中だるみ」へと移行させないためにも重要である。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです。

目標1　面談前に生徒を把握する

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❶ 面談事前準備シート

●生活について

・学習時間　・平日［　　時間］　・休日［　　時間］

・帰宅時間［　　時　　分ごろ］

・就寝時間［　　時　　分ごろ］　・部活動［　　時 ～　　時］

●進路について

・将来就きたい職業

・その職業を目指すきっかけ、理由

・将来学びたい学問

・その学問を目指すきっかけ、理由

・進学したい大学

・その志望校を目指すきっかけ、理由

生徒に家庭学習や就寝など、1日の流れを再確認させ、時間の使い方を把握する。成績中間層・下位層は特に帰宅以降の時間の使い方がうまくできていないことが多い。

将来をどのくらい具体的に考え、志望と進路が一致しているかを確認する。

●学習について

・苦手、ついていけていないと思う科目

・学習上の悩み（家庭学習の取り組み方など）

授業態度が良好でも、実はついていけていなかったり、成績が下降していない生徒も実は悩みを抱えていたりする場合がある。手遅れになる前に早めに対策を立てることが重要。

●イメージしていた高校生活と、今の現実は同じですか。もしも何かギャップを感じているようであれば、どんなことが思っていたことと違うのかを教えてください。

入学前のイメージとのギャップは、生徒の現状への不満の理解につながる。必ず確認したい。

データ作成・加工のPOINT

部活動が学校生活の中心になる中で、1学期の学習の成果が成績に具体的に反映され始める時期である。生徒自身、自分の位置が何となくわかってきたこのタイミングで、「諦める必要はない」「まだ間に合う」と、前向きになり、具体的な改善点を発見する面談が求められる。そこで、面談にあたっては、❶のような事前準備シートを活用するとより効果的だ。学習、生活、進路と幅広く生徒の状況を把握し、抱えている課題や不安を見つけるようにしたい。

プラスαの一工夫

学年団で事前に情報共有を図る

学年団で事前に面談の目的を共有すると共に、事前準備シートで収集した内容を確認し、気になった生徒について情報を交換する。特に、若い世代の教師が多い学年団の場合、ベテラン教師などから、面談の際のアドバイスを受けることも大切だろう。

この時期の重要性を生徒に明確に伝える

面談前の準備シートに真摯（しんし）に取り組み、積極的に面談に臨ませるために、生徒にはこの時期の重要性をきちんと伝える。「成績の差が明確になり始める時期」「家庭学習習慣を身に付ける最後のチャンス」「高校3年間を走り抜くための大切な時期」など、明確な言葉を生徒に投げかけたい。

目標 2

成績下位層を固定化させない

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

❷学習習慣改善のためのポイント提示

テーマ	改善のためのポイント
時間の使い方	◎夜、眠くてなかなか勉強がはかどらないときは、朝30分、1時間早く起きて勉強する ◎暗記物は寝る前に覚えると効率よく覚えられる ◎授業が終わったらそのまま教室で宿題などを済ませてしまう。気持ちが「勉強モード」のままなので、目の前の宿題にすぐに集中できる 【クラスメイトにほかのアイデアを聞いてみよう! →　】
部活動との両立	◎朝、夕の通学時間で暗記物を中心に少しずつ勉強する ◎休み時間や部活動のない休日などにできるだけ勉強して普段の遅れを取り戻す ◎絶対に授業をわからないままで終わらせず、疑問点は部活動開始前に必ず解決しておく 【クラスメイトにほかのアイデアを聞いてみよう! →　】
苦手科目学習法	◎1日30分でもよいので必ず毎日勉強する ◎休み時間などのちょっとした空き時間に苦手科目の教科書を眺めるようにする ◎最も基礎的で、分量の少ない問題集を1冊選び、最後まで取り組んでみる 【クラスメイトにほかのアイデアを聞いてみよう! →　】

❸悩み解決シート（先輩＆先生）

悩み	3年生の先輩の意見	先生の意見
部活が大変で家に帰ると疲れて寝てしまい、勉強できません。勉強も頑張りたいと思っているのですが……。	部活に打ち込むことは、非常に重要なことです。僕も野球部を3年の夏まで続けていましたが、練習はハードでした。そこで根性がついたのか、今では志望校合格に向けて、長時間集中して、勉強ができています。僕の場合は、通学時間、帰宅時間をうまく使っていました。工夫次第で勉強時間は少しずつでもつくり出せるものですよ。もう一度自分の生活習慣を確認してみるとよいと思います。	部活を辞めても勉強時間は増えず、だらけてしまった先輩も少なくありません。まずは授業に今まで以上に集中するようにしてください。また、教科担当の先生に、勉強方法を相談してみるのもよいと思います。それでも状況が改善しないときにはじめて、部活を辞めることも検討するのがよいと思います。そこまで粘った上での退部であれば、部活動を辞めたあと、きっと勉強に集中できるはずです。
やりたいことが見つからなくて悩んでいます。志望校はどのように決めればよいのでしょうか。	私も、1年生のときは、これといって就きたい職業、学びたい学問がありませんでした。そんな私の転機になったのは……	学校の授業で一番楽しい科目から考えてみることをお勧めします。例えば、英語が好きなのであれば……

データ作成・加工のPOINT

成績下位層の生徒は、基本的な生活習慣、学習習慣が身に付いていないことが多い。また、授業についていけない教科が複数存在し、学習といっても具体的に何をすればよいかわからず、更に授業についていけなくなるというサイクルに陥りがちである。そこで、成績下位層の生徒には、面談の場で教師が具体的な行動・内容を提示することが重要になる。❷のように、生徒が直面しやすい課題について、いろいろなアプローチによる解決策を提示し、気軽に取り組ませてみたい。負担なく取り組めるヒントを与え、生徒に少しでも変化の兆しが表れれば、それを評価し、次の段階に進ませるようにする。また、❸のように3年生の先輩の声と教師のアドバイスを比較し、生徒に自分に合った解決策を考えさせるのも1つの方法だ。生徒に「まだ間に合うし、その方法はいろいろ残されている」と希望を持たせることが重要だ。

プラスαの一工夫

面談後の定期的な声かけが重要

面談時に、生活面、学習面とやるべきことを具体的に示し、期間を定めるなどして生徒に取り組ませたら、その成果を生徒自身に報告させ、確認する。成績が低迷している生徒は「この高校では、自分の位置はこのくらいだ」と既に諦めかけ、取り組みの成果が表れるまで待つことが難しい。小さな変化、成長を褒めるなど、教師には伴走者の役割が求められる。

生活習慣の改善について個別にフォローする

成績下位層の生徒は、生活習慣の乱れを改めることで、学校生活全般の在り方が改善されることが多い。07年度10月号の当コーナーで紹介した「学習の記録」を個別に取り組ませるなど、個別指導で生活上の改善点を生徒と共に見つけていくことが重要になる。（「3年生向けデータ〈2学期〉」からダウンロードできます。詳しくは下欄参照）

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

目標 3

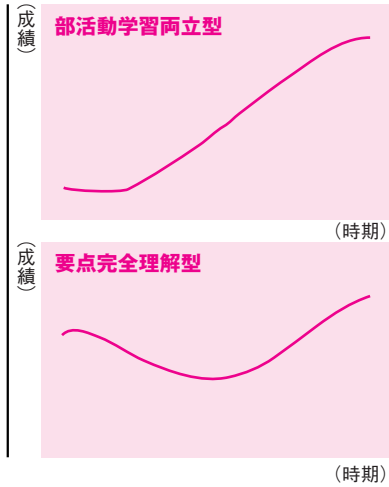
成績中間層の進路意識を高める

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

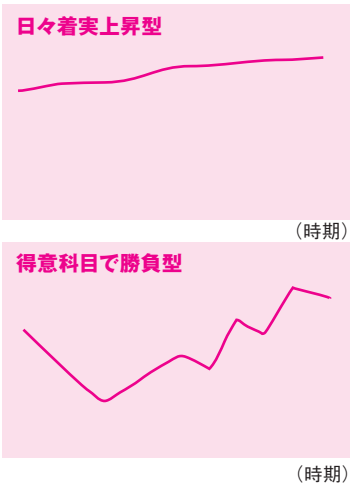
❹ 先輩の模試偏差値推移（大学・学部別事例集）

・○○大文学部に合格した4人の先輩の例



●隙間時間を利用したり、授業で理解してしまおうとする意識が非常に強かった生徒。部活動引退後は、部活動の時間をそのままし勉強時間に充て、巻き返しに成功した。

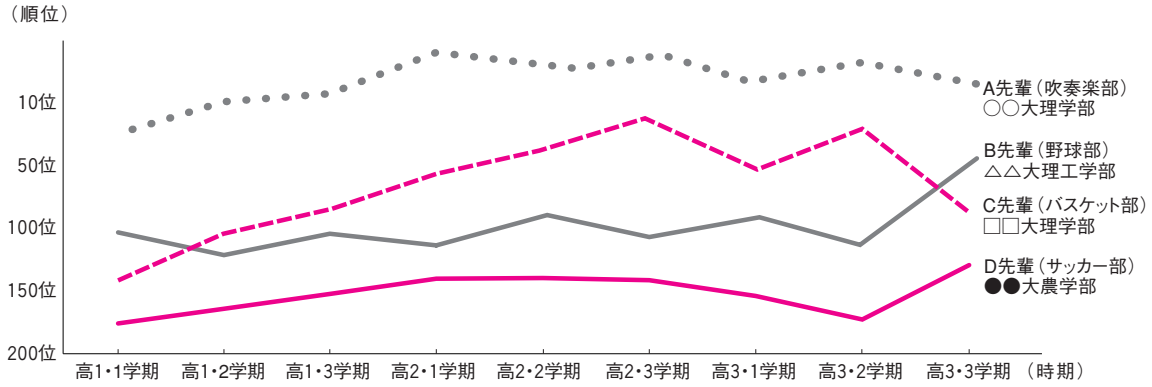
●授業に集中し、定期テスト対策を十分に行うことで、苦手科目をつくらなかった。模試の復習も先生に添削を依頼するなどして完璧に行った。



●平日の家庭学習時間は1年生のときから4時間を確保。ゆっくりと成績が上昇し合格圏内に。やはり、積み重ねた努力が裏切ることはない！

●数学が得意科目。国語に若干の不安があったが、得意科目の高得点で巻き返す作戦を選択。数学の配点が高い大学を積極的に受験した。

❺ 定期考査の順位と合格大



データ作成・加工のPOINT

生徒の過半数を占める「成績中間層」と呼ぶべき生徒層は、最低限の学習に取り組んではいるが、安定した力を発揮し、成績上位層に食い込むには至っていない生徒たちだ。多くの場合、苦手科目を持っているが、ちょっとしたきっかけで成績が大幅にアップする可能性も秘めている。そんな成績中間層の生徒が「やればできる」ことを実感することは、クラス全体の雰囲気を前向きなものにするためにも重要である。そこで、成績中間層を現状に安住させないために、1つ上を目指す意識付けを仕掛けたい。❹は、1年次に成績中間層にいた先輩の合格までの成績推移と志望実現のポイントを示したものだ。さまざまな生徒が自分に対応させて考えられるよう、多様なパターンを用意しておきたい。また、日々の学習、定期テストが入試結果につながっていることを実感させるために、❺のようなグラフを活用するのも一案だ。

プラスαの一工夫

勉強の仕方を再度チェックする

学習時間はある程度確保されていたり、授業中もしっかりノートを取って聞いていたりするのだが成績が伸び悩んでいる生徒は、勉強のやり方が間違っている場合もある。「数学は問題を解かずに解説を読むだけ」「英語は音読をせず、単語の意味を調べるだけ」など、専門教科の知識を持たない担任でも間違いを指摘できるケースもあるようだ。特に、中学時代、塾から課題を細かく指定されてきた生徒ほどその傾向が見られる。苦手科目の学習法について簡単に確認してみるとよいだろう。

大学名を具体的に挙げ進学意識を刺激する

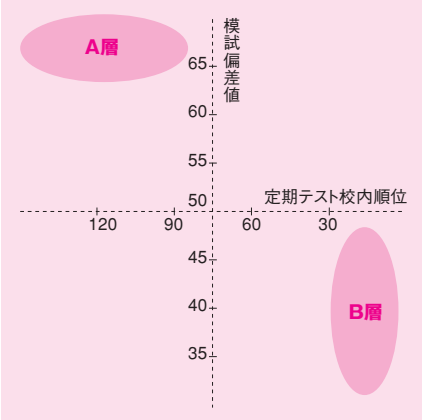
この時期の生徒は、具体的に志望校・学部の名前を挙げられないことが多い。しかし、だからといって志望校に関する関心が低いとは限らないのも事実だ。「1年の成績が自分とそれほど変わらなかった先輩が、地元の国立大に合格した」といった事実によって、自信を持つことも多い。大学入試における自分の位置を知る材料として、身近な大学を先輩の入試結果と共に紹介したい。

目標 4　成績上位層を安定させる

『VIEW21』編集部ヒアリング結果より

ダウンロード

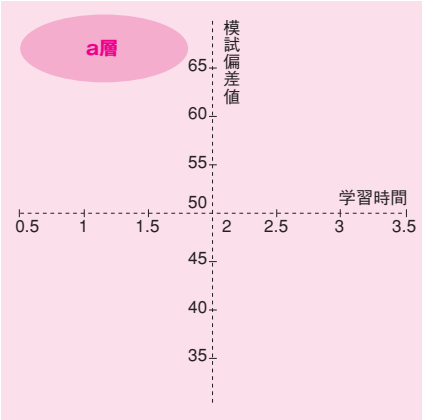
❻ 模試と定期テストの4象限



A層への面談時の声かけ
定期テストよりも模試の成績が良い場合、日々の積み重ねが不足していたり、特定の苦手科目の存在が考えられる。学習習慣を見直すと共に、毎日の予習復習の徹底により基礎学力を固めていこう。

B層への面談時の声かけ
定期テストに比べて模試の成績が振るわない場合、既に学習した範囲の理解が実戦力にまで消化されていないこともありえる。模試の復習を通して、実戦力を養おう。

❼ 模試と学習時間の4象限



a層への面談時の声かけ
学習時間が少ないのに模試の成績が良いという場合、学習習慣が定着していないため、高2以降で成績が大きく下降するケースもある。現在の成績は、中学時代の「貯金」によるものかもしれない。油断せずに日々の学習を大切にしてほしい。

データ作成・加工のPOINT

1年生の2学期は、中学校時代の「貯金」も消え、高校に入ってからコツコツ頑張ってきた成果が少しずつ出てくる時期。成績の良い生徒は、学習をした上での成績なのか否かを改めて確認する必要がある。❻ ❼ のように、定期試験と模試の成績がどのくらいギャップがあるのかを確認したり、模試の成績と学習習慣の定着度を確認したりすることも1つの方法だ。自分の今の成績がそれに見合った努力に裏打ちされたものかどうかを見極めさせ、今後の学習計画を考える上での資料とさせたい。

プラスαの一工夫

成績上位層を集団で意識付ける

成績上位層に対しては、集団の力を利用した意識付けも効果的だ。各クラスの成績上位層を学年を通じて集め、集団として難関大を目指すための意識付けや補講などを実施する学校もある。教師の指導の時間は成績下位層、中間層に充てられる場合が多いため、成績上位層には生徒同士の学び合いの場を設け、生徒を自主的に動かすように工夫したい。

模試の直後にアンケートを実施

11月に実施される模試の直後に、「勉強の成果が表れたこと」「うまくいかなかったこと」「自己採点結果」「今後の決意」などについてアンケートを取っておく。学習状況について客観的に分析できる生徒が多い層なので、今後の面談で活用できるよい材料になるだろう。

ウェブサイトからダウンロード!

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生きたデータの見せ方 検索 クリック!

HOME ＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください。

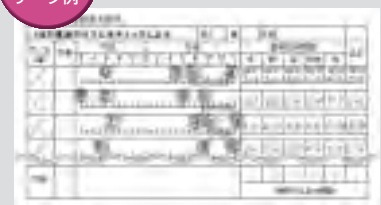
加工可能な資料がダウンロードできます！

このコーナーで紹介してきた図版や関連する図版は、加工可能な形でウェブサイトにアップする予定です。
学校の実態に合わせてご活用ください。

- 面談事前準備シート
- 悩み解決シート

…などです!

人気のダウンロードデータ例



学習の記録（生活時間帯併記型）
生徒に自らの学習状況を客観的に把握させ、具体的な改善点や安心材料を指摘するためのツール。起床・帰宅・学習開始・就寝の時間を固定させ、生活のリズムを整えさせます。

先輩が進路を決めた理由（部分）
面談などの場で生徒に提示すれば、先輩の進路決定の道のりを見ながら、「では、自分はどのように決めていくのか」を模索するきっかけとなるツールです。

ダウンロード このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/ →HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

予習→授業→復習サイクルの徹底が教育の根幹

9月号の特集の前橋高校・倉吉東高校の取り組みに敬服する。本校も生徒に予習の重要性を意識させ、予習→授業→復習のサイクルの定着に取り組んでいるが、より徹底させる必要性を感じた。また、さまざまな工夫をして、生徒の知的欲求を高める必要性を痛感し、進路意識の醸成に努めたいと思う。前橋高校の「知のフロンティア」と同じとまではいかなくても、再度自校の強みと伝統を検証し、システムを練り直したい。

［徳島県立池田高校・前田茂］

自立を促す「待つ指導」の難しさ

6、9月号の特集テーマ「『自立する高校生』をどう育てるのか」は非常に大切だが、最近は「待つ指導」ができにくい環境になっていると思う。目先の結果を気にしすぎ、教える側にゆとりがない。年間計画に余裕があれば何らかの取り組みを入れているが、本当にそれで自立を促すことができているのだろうか。きっかけを与えるのは必要だが、効率的に目先の結果を出すための指導をしすぎている面もあると感じる。要はバランスなのだろうが、現実にはなかなか難しい。先進的な取り組みをする高校の例を参考に職員同士で情報交換をしていきたい。

［広島県・匿名希望］

生徒とかかわる距離感の難しさ

9月号「指導変革の軌跡」の岐阜県立関高校は追跡記事として興味深かった。2006年4月号の記事と併せて読むと、深化の具合がよくわかり参考になった。また、橿原学院高校のチューター制については、「生徒と徹底的にかかわる」という趣旨には賛同するが、これを組織的に行う難しさを考えてしまった。以前、生徒が担任を選ぶという高校があったが、今はどうしているのだろうか。「かかわる」ことが大切だからこそ、中途半端はよくないと思う。実践での問題点はどこにあるのかも知りたい。

［埼玉県・久保島昌一］

進路決定に好影響を与える「チューター制」

9月号「指導変革の軌跡」の橿原学院高校の「チューター制」に興味を持った。私立高校だから可能なシステムかもしれないが、生徒にとって担任以外に本音で語れる環境があることは、生徒の進路決定の場面によい影響を与えていると感じた。やはり我々教師の「情熱」が生徒にとっては重要だと改めて感じた。［鹿児島県・匿名希望］

教師の思いと実績を乖離（かいり）させないポイントとは

9月号の「生きたデータの見せ方・つくり方」についてだが、夏休みの学習把握をするのならば、5段階評価よりも4段階評価にしておいた方が、状況をはっきりとつかみやすいかもしれない。また、2年生のこれからの時期は、教師の思いと生徒の学習の取り組み方の乖離が大きくなる時期。この時期に生徒が自ら意欲を持って学習に臨むための、インパクトのある手法が知りたいと思う。

［三重県・匿名希望］

教師川柳

素直だが自分らしさはあるのかな

広島県・g・m・t・hさん

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 4

教育最前線からのホットな話題を紹介します

『VIEW21』へのご意見・ご感想をBenesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。

②画面右端の『VIEW 21』の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。

③入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

小誌に対してお寄せいただいた「全国の読者の声」がウェブサイトでご覧いただけます。

http://benesse.jp/berd/

編集後記

「改革前、生徒は学校という建物に来ていただけだった。それが、教師が手をかけることで、生徒は『学校』に来るようになった」、心に残った言葉です。学校はただの建物ではない。それは当たり前のことです。しかし、当たり前の中にこそ、課題解決のヒントがある。先生方に必要とされる『VIEW 21』を目指して、「生徒の自立」や「教師の教科指導力」など普遍的なテーマに挑み、課題を乗り越えるヒントとなる“鍵”を探し続けたいと思います。（佐藤）

VIEW21 10月号 Vol.4　2008年10月22日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　大日本印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　仲藤里美、長谷川敦、山口慎治
撮影協力　荒川潤、川上一生、川本聖哉
写真提供　読売新聞社

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒163-1422　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー22階
電話　03-5371-1238

©Benesse Corporation 2008

VIEW21 2008 December 12月 Volume 5

次号は12月1日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です